第一五〇回　江戸東京フォーラム　（公開市民フォーラム）

「都心居住の再考ー江戸東京の生活史・文化史の視点からー」記録

日　時　二〇〇一年一一月二五日（日）一三：〇〇～一七：〇〇

会　場　東京都江戸東京博物館本館一階ホール

企画趣旨 …… 二

企画趣旨説明「都心居住の再考ー江戸東京の文化史・生活史の視点からー」　陣内　秀信 …… 三

講演（1）「江戸のまちと住まい」　波多野　純 …… 五

講演（2）「東京の近代の町家と繁華街」　初田　亨 …… 一〇

講演（3）「昭和初期のアパートメントハウスとライフスタイル」　大月　敏雄 …… 一五

講演（4）「近代東京の下町」　森　まゆみ …… 二〇

講演（5）「東京の都心に住む」　東　孝光 …… 二五

討論　（司会）　陣内　秀信 …… 三〇

企画趣旨説明者・司会者・講師紹介 …… 三九

江戸東京フォーラム話題一覧 …… 四〇

主催　財団法人　住宅総合研究財団・財団法人　東京都歴史文化財団

企画趣旨

都市が魅力をもつには、都心にもしっかりとした住宅の形式が確立し、人々の暮らしが営まれることが必要である。歴史を振り返ると、江戸の町には、町家と長屋からなる高密な市街地の中に、独自のコミュニティと生活文化が生まれた。庶民の住まいそのものは狭くとも、周辺の路地、水辺、盛り場などと一体となった魅力ある都心居住が成立していた。昭和初期の東京にも、看板建築という近代町家が生まれ、同潤会のアパートハウスなど、モダンなライフスタイルと結びつく都心居住の新しい形式が誕生した。

だが、戦後はもっぱら郊外への住宅地の拡大にともない、都心居住は力を失った。しかも、バブルの時期、東京は住めない都市とのイメージを強めた。しかし、地価が下がった現在、再び都心居住が見直されている。それに伴い、高層マンションの建設が歴史的な地域環境を破壊するという問題も各地で起きている。いまこそ、都心に住むための理にかなった建築の形式を確立して、生活文化を再構築することが求められよう。

本フォーラムでは、都心居住にこだわる建築史・建築計画の研究者、建築家、作家の方々に、この問題を生活史・文化史の視点から論じていただく。

企画趣旨説明
都心居住の再考
―江戸東京の生活史・文化史の視点から―

陣内　秀信

みなさま、今日はよい天気で行楽日和のなかを私どものフォーラムにお集まりいただきましてありがとうございます。

私たちは住宅総合研究財団のもとで、江戸東京フォーラムという研究会を定期的に開催しております。それと同時に、毎年このような形で公開市民フォーラムを企画してまいりました。今年は、この江戸東京博物館で東京建築展が開催されています。その企画展と呼応したテーマ「都心居住の再考」を考えました。江戸東京フォーラムというのは、さまざまな学問分野の方々が集まっている学際的で、非常に刺激ある場なのです。ですから、このフォーラムのテーマも大きく広げて、生活史とか文化史の視点から、都心居住を大いに論じていこうということになりました。

最近、都市再生という言葉がいろいろ飛び交っています。小泉内閣もそれこそ一つの切り札としてそういう言葉を使っている面があります。しかし、それはほんとうの都市再生というよりは、景気の回復に使われている懸念があります。バブル崩壊後の経済が停滞しているなかで起死回生の方法として都市再生が叫ばれている節があります。ほんとうの都市再生というのは、そうではないと思うのです。バブルの時代に東京の都心がずたずたにされてしまった。魅力がなくなってしまった。住みにくい町になってしまった。そういう状況から魅力のある町をつくり直していくというのが都市再生です。都市が本来の魅力を持つためには、都心にもしっかりと住宅の形式が確立して、人々の暮らしがあって、家だけではなくて、周りにいろいろな文化的な、あるいは経済的な賑やかさとか刺激があって、人々が交流できる場が必要だと思います。

そういうあり方をこれからつくっていくために、今日は歴史から学びたいと思います。江戸の町は、町家と長屋からなる高密な市街地があって、そこにコミュニティと生活文化が独自な形で生まれました。家は狭くても周りに路地があり、水辺があり、盛り場があるといったように、全体として、生活を活気づけ、生き生きとした暮らしが繰り広げられる場があったのです。そういうものと一体となった魅力ある都心居住が江戸にはあったのです。

そういうセンスは、近代においてもいろいろなところに受け継がれていきます。看板建築という近代的な町家が生まれましたし、また、同潤会のアパートメントハウスは、残念ながら少しずつ姿を消しますが、たいへん高い評価を常に得ています。そして、銀座がそのころ非常に人気を呼びましたし、新宿などもこの時期に町の発展の最初のきっかけをつかみました。そういう賑やかな町、しゃれた繁華街、カフェの文化と結びついて都心居住の形式が再度確立しました。その辺も今日はたっぷりお話が伺えると思います。

ところで、戦後は、住宅地が郊外へ拡大しまして、いま申し上げたような都心居住の力が失われてしまいました。ベッドタウン化した郊外、みんな大きな企業に働き、サラリーマン的意識になってしまいました。団地やニュータウンに寝に帰るというベッドタウン化が進みました。そういう意味で、都市的な文化の香りというものが東京から薄れていってしまいました。しかも、さきほど申しましたバブルの時期には、東京は住めない都市というイメージを非常に強めてしまったわけです。

私は地方のまちづくりについてのシンポジウムや講演会に伺うことも多いのですが、そのとき、東京はまだいいと思うことがあ

ります。地方都市の都心部はほんとうに寂れてしまって魅力がない。人はどんどん郊外に出ていってしまう。車で都心に出ると、駐車スペースばかりが町の風景をつくっている。そのような都市解体の現象が全国的に進んでいます。そういう意味でも、東京でこそ先端を切って都心居住の魅力的なあり方をつくっていきたいと思っています。

最近、地価が下がったこともあって再び都心居住がいろいろな形で見直されています。各区もそういう方向で住宅を供給しようとしていますし、民間のディベロッパーもかなり熱心に動いている。しかし、それに伴って、もう一方で高層マンションの建設がどんどん進んでいます。今日お話をされる森まゆみさんの地域、谷中や根津辺りでも高層マンションの難しい問題が生まれています。それから、神楽坂とか四谷荒木町とかは、私の大好きな町で、よく町を徘徊しますが、こういう都心に近い所の落ちついた、雰囲気のある環境がいま破壊という危機に直面しています。

私はヨーロッパの都市も研究対象としているのですが、ミラノにしても、パリにしても、コペンハーゲンにしても、どこでも一八世紀、一九世紀、そして二〇世紀前半と積み上げてきた都心に住む優れた文化のあり方があります。建築的にみますと、大きめの中庭をうまく取り込んで、中層の四階建て、五階建てぐらいの見事な集合住宅があります。緑も取り込んで落ちついた、そしてちょっと外へ出ればカフェがあったり、ブティックがあったりと、人と出会う場があります。芝居にも行ける。オペラにも行ける。しかも川が流れていたり、ゆとりがあるわけです。職と住が近い。ヨーロッパでは、みんなが頑張って築き上げてきた成果がいまに引き継がれています。戦後は、やはり郊外型ニュータウンづくりに没頭した時期もありましたが、もう一度都市を再生する、あるいは都心に住む魅力をみんなが感じてまた戻ってきました。ヨーロッパにはこんな戦後の歴史があります。

このようなことを考えますと、東京は、大いに可能性がありますし、どうしたらそういう方向に向かえるのか、それを今日は歴史から学びながら、現在の問題を考えていきたいと思います。このフォーラムでは、都心居住にこだわっておられる建築史の研究者、江戸時代は波多野さんに、それから明治以後、昭和の初期ぐらいまでの近代のお話は初田さんにお願いをしています。そして、大月さんは建築計画分野から集合住宅の歴史を研究され、特に同潤会を中心として昭和初期から戦後まで、研究領域を広げておられます。その大月さんからは東京の集合住宅の歴史についてお話をいただきます。森まゆみさんは地域雑誌『谷中・根津・千駄木』を編集され、さまざまな地域の歴史と文化と生活を掘り起こして、しかも実際のまちづくりまで非常にアクティブにかかわりながら、いろいろな発言をされています。森さんには実際に都心に住んでられる立場から話をしていただきます。お住まいがある谷中は下町と言われますが、実はいろいろな面を持っていますからお話が楽しみです。そして、東先生は、何といっても建築家として、都心居住の象徴である「塔の家」を設計された経験をお持ちです。数日前にもＮＨＫテレビで紹介されたということですが、建築学科の学生たちは、東先生の「塔の家」はみんな知っていまして、実際に見てみたい建物に挙げます。ですから、私たちがこういう問題を考えていくうえでの原点です。どのようなお話をしていただけるのかが楽しみです。

今日は、できるだけ建築という狭い範囲に固まらないで進めたいと思っています。人々がどのように暮らしてきたか、ライフスタイル、人間関係、そしてそこにどういう文化が生まれたかという点にまで話を広げます。そのうえで、都心居住にはどういう要素がそろっている必要があるのかを大きな視点で、みなさんといっしょに考えてみたいと思います。

講演は歴史的に古いほうから遡りますので、まず、波多野さんにお願いします。

講演（一）
江戸のまちと住まい

波多野　純

■まちに住む

江戸のまちは、今日のテーマの通り、まさに都心居住の典型でした。江戸のまちを面積比でみると、七〇％近くを武家地が占め、残りを町人地と寺社地が半分ずつです。一五～一七％、非常に狭い地域に一〇〇万の人口の半分、つまり五〇万町人が住んでいました。町人地の人口密度は、平方キロメートルあたり五万五〇〇〇人だそうです。東京二三区でいちばん人口密度が高い中野区で二万人ですから、江戸の町人地は中野区の三倍近くになります。では、住みにくかったかというと、決してそうではなかったと思います。

近代の都市計画では、地域を住居地域・商業地域・工業地域に分けています。住居地域を落ち着いた住環境に維持し、商業地域を高密度に開発し、工業地域に公害を閉じ込める。ところが、いずれも失敗しています。江戸の町人たちが住んでいた地域は、現在の東京の商業地域にあたります。その江戸の町人地の住まいとくらしを、お話ししようと思います。

熊さん、八つぁんの住む世界の話です。私が強調したいのは、町に住むということは、決して狭い部屋に住んでいるのではなくて、寺山修司が「書を捨てよ。町に出よう」と言ったように、町に住むというのは、町を自分の居間にして暮らすことです。江戸時代もきっとこの点が楽しかったのだと思います。

■北斎が北斎でいられるのが都市

前置きが長くなりますが、私は、都市の歴史をテーマに勉強をしています。ところが、都市とは何か、うまく定義ができません。いつも、私の個人的な定義と申し上げてお話しするのですが、「自分のことが自分でできなくなったら都市だ」と考えています。

村では飲み水は井戸や川から汲めばいいし、出したうんこは自分の所で肥料にすればいい。ゴミも自分の所で埋めるなり燃やせばいい。火事が起きても自分の家が燃えたらそれで済んでしまう。ところが、都市に住むということは、いま申し上げた全部を他人の世話にならなければ生きていけません。つまり、自分のことを自分で面倒みきれないのが、都市です。でも、これは小学生の頃にお母さんに叱られる言葉とは意味が違います。だからこそ都市には職業が成立します。限られた専門しかできない人も、それさえできれば都市では生きていく資格があります。

たとえば、葛飾北斎は、絵さえ描ければ北斎でいられた。これが都市です。村だと、そうはいかない。北斎は長野の田舎・小布施に逗留したではないか、と反論されるかも知れませんが、あれは客人としてです。

都市とは、自分のことが自分でできないのと引き替えに、多様な職業が成立し、高水準の技や芸が花開く場所です。だから、魅力的なのだと思います。

■武士のまちから町人のまちへ

「武州豊嶋郡江戸之庄図」という江戸時代初期、寛永年間の江戸を描いた地図があります。それには、武蔵野台地の先端に江戸城本丸があり、後ろの吹上に御三家の屋敷があります。城の前、大手前・西の丸下・大名小路・桜田門外には広大な大名屋敷地があります。いっぽう、本町通りと通町通りを中心とした、海に近いわずかな地域が町人地です。この狭い一帯に五〇万の町人が住んでいました。

国立歴史民俗博物館に、「江戸図屏風」

があります。制作年代は確定していませんが、明暦大火前、江戸時代初期の様相を描いたとされます。武士の都のイメージが強い屏風です。江戸時代の初めの江戸の町は、まさに武士のための町でした。

私は江戸時代を中心に勉強をしています。しかし、武士が好きで、権力構造が好だと誤解されたら困ります。江戸時代というのは面白い時代で、はじめの五〇年間ぐらいは武士が主人公の時代でした。しかし、その後は、その体制を表向きはあまり変えないままに、町人たちは自分たちの世界を造り上げました。

■江戸の中心日本橋

江戸東京博物館に原寸で復原した日本橋です（**写真①**）。江戸時代、日本の中心はどこだろうか。京都ではなく、江戸でしょう。では、江戸の中心はというと、江戸城よりは、むしろ日本橋でしょう。

写真②は、佐倉の国立歴史民俗博物館に作った日本橋・江戸橋広小路復原模型です。日本橋を渡って通町通りを銀座のほうへ向かいます。

このような復原模型を作るには様々な史料が必要です。たとえば、沽券図。江戸時代の土地の権利台帳です。地主の名、家守といわれる大家の名、土地の公定価格が書かれています。

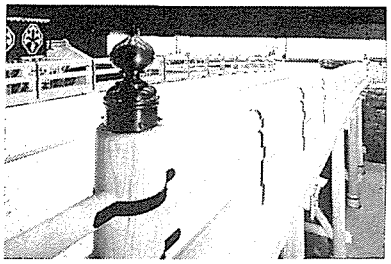
同じ模型にあるように、通一丁目東側には、西川・伴伝・白木屋など近江商人の江戸店が並んでいました（**写真③**）。

■脚気と買い食い

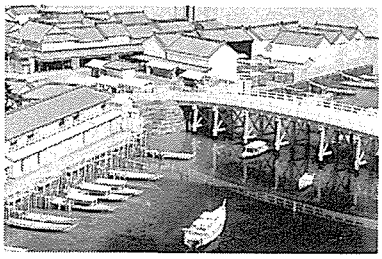
白木屋の平面図では、通りに面して大きな店があり、まわりに多数の土蔵が建っています。奉公人は、二階でくらしています。奉公人は、すべて地元近江の出身です。

経済史を研究されている林玲子先生がお書きになった『白木屋犯科帳』（吉川弘文館）という大変面白い本には、白木屋の奉公人が犯す犯罪の記録が載っています。これによると、丁稚奉公として一一、二歳で勤めたころに犯す悪事の原因は、たいてい買い食いです。それから歳をとると吉原通いになって、金遣いがいちばん荒くなるのが芝居狂いだそうです。

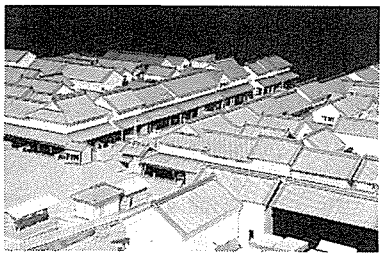
なぜ買い食いをするか。江戸の町人はみんなが米の飯を食えました。各藩の藩米を売り捌かなければ困るわけですから、江戸ではみんなが白米を食べられたのです。地方は雑穀主体だとされますが、最近の研究では、そんなことないという説もあります。どちらにしろ江戸では白米を食べていた。すると、ビタミンB1の不足に陥って脚気になります。脚気は、「江戸患い」といわれるように、江戸にとても多い病気でした。脚気にかからないためには、多種類の食物を摂る必要があります。そのため、白木屋の奉公人たちも先輩に協力して、くすねたお金で買い食いをしてしまうわけです。



写真①



写真②



写真③

江戸東京博物館に作った両国橋西広小路の模型です（**写真④⑤**）。屋台店で、すし屋もあれば、てんぷら屋もある。そば屋もうなぎ屋もあります。つまり、江戸では、自宅で食べなくても、町中でうまいものが食える文化が、都心に成立していました。

■雪隠・井戸・ゴミ溜・稲荷

写真⑥も江戸東京博物館に作った「町の構成と施設」模型です。江戸のくらしを、都市的な視点から説明するのに、大変有効な模型です。建物をすべて作ってある町屋敷もあれば、明地になっているところもあります。しかし、未完成の模型でもなければ、本当に明地になっているわけでもありません。**写真⑦**は井戸や雪隠のような長屋の共同施設を説明するために、周囲の建物を省略したものです。

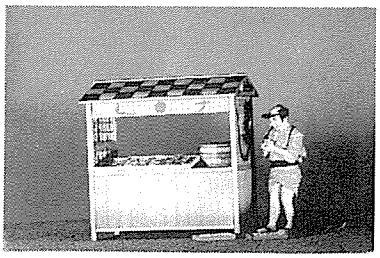
江戸の人たちの飲み水は、井戸水ではなく、神田・玉川上水の水です。道路下の幹線から、町屋敷内の上水井戸に引いてきて、飲みます。その説明を目的に、道路を掘って水道管が通っている模型を作りました。ところが、それを見たお母さんが子供に向かって、「あそこの穴は落っこちるね」と説明しているのを聞いて、博物館というのは難しいものだな、としみじみ感じました。

神田上水、玉川上水は、幹線が石樋で、あとは木樋です。道路に桝があって、そこから各々の屋敷地へ竹樋で水を引き、上水井戸に貯めます。

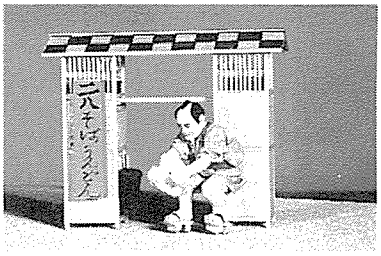
裏長屋の奥の猫の額ほどの明地に、井戸と雪隠とゴミ溜とお稲荷さんがセットで設けられています（**図①**）。裏長屋は九尺二間といわれるように、四畳半一間程度です。押入もなく、布団は枕屏風の裏に隠します。入口に竈と流しがありますが、水は引かれていません。共同井戸で洗い物をし、最後の調理だけ、うちの中でということになります。

■都市の安全性

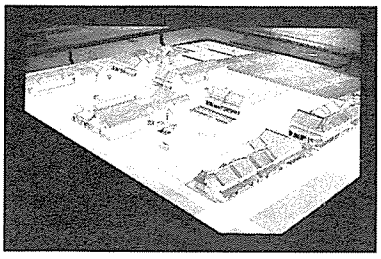
江戸の人々は、多摩川の羽村から四〇キロメートル水を引いて、他人の世話になってはじめて水が飲めます。これが、都市・江戸です。乱暴な言い方をすると、玉川上水に毒を投げ込めば大量殺人が可能です。そういうことをしない、あるいはあり得ないと考えるところに、都市生活の基本があり、それを疑いだしたらとても怖くて住めません。それが確認できる時代は幸せだと



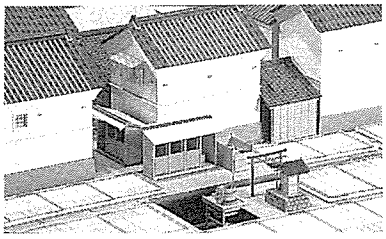
写真④



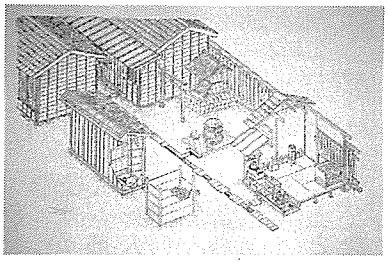
写真⑤



写真⑥



写真⑦



図①

思います。現代人は、水道栓をひねる時に毒が入っているとは考えませんが、逆に確認のしようもありません。毒を投げ込む人はいない、と勝手に信じているだけです。水俣病にしろ何にしろ毒が投げ込まれたのです。ただ、その投げ込まれた毒が瞬時に人を殺さず長期間かかって被害を起こしたから、公害という殻をまとって加害者がいない話が作り上げられたのです。でも、加害者はいるし、原因はある。江戸のまちは、こういう都市生活の基本がちゃんとみえていた町ですから、現在よりむしろ健全だろうと考えています。

■村と結ばれた江戸のくらし

長屋の住人たちは、共同で便所、雪隠を使いました。糞尿は、近郊の農民が汲み取りに来ました。糞尿は立派な肥料ですから、最初は野菜、後にはお金を置いて行き、大家の収入になります。

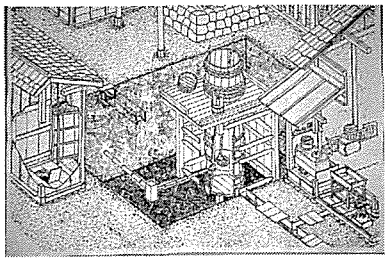
大家店子の尻で餅を搗き

という川柳があります。人の出したもので金を稼ぐのはきまりが悪いので、大家は、その金を貯めておいて、年末に店子に餅を配ったそうです。

江戸のくらしは、便所ひとつをとってみても、近郊農村ときちんと繋がりを持っていました。先ほどの飲み水にしてもそうです。都市のインフラと人々のくらしに、密接な関係がありました。

江戸のゴミは現代ほど多くはありません。割れた瓦や落ちた壁土、土系のゴミが多く、船に積まれて深川の埋立てに使われました。いまの深川地域は、江戸のゴミでできています。

上水井戸には底があり、「井戸ざらい」といって、定期的に底を掃除する必要があります。水を止めて、底の掃除をするのは、長屋の住人総出の作業で、同じ釜の飯を食ったと同様に、お互いの連帯感を強める意味がありました（図②）。



図②

■長屋に嫁さんが来た

長屋の住人はどんな人たちだったかと申しますと、棒手振りとか職人さん、商店の奉公人などです。先ほど大店の奉公人は店に住んでいると言いましたが、ある年齢に達し妻帯した人たちは長屋に住んでいました。

その人たちは、どのような出自だろうか。村では、長男が相続をします。すると、次男三男は居候を続けるわけにはいかなくなって、都市に出て来ることになります。都市に出て来て、頑張って大工になったり、棒手振りの魚屋になったり、何とか食えるようになると、田舎から親の面倒を押しつけられます。一人前になった二〇代、三〇代の息子の長屋へ両親が襲ってくるわけですから、結婚などは遠い先の話になってしまいます。江戸の結婚年齢は四〇代といわれています。人生わずか四〇年といった時代に、結婚年齢が四〇歳というのは、随分遅いわけです。

九尺二間にすぎたるものは
紅のつきたる火吹き竹

この川柳は、裏長屋に待ちに待った嫁さんが来た、それはとんでもなく嬉しいことなのだという雰囲気が私たちに伝わってきます。

■**火除地から盛り場へ**

写真⑧は、日本橋と江戸橋の間の南側、江戸の中心にあった江戸橋広小路という盛り場です。ここには、百数軒の床見世が並んでいました。小間物屋や古本屋など、ひやかして歩くだけでも楽しい盛り場です。

ここは日本橋川南岸ですから、北からの季節風による延焼をくい止める延焼防止帯の役割を果たしていました。幕府は、火除地として、明地にしようとしましたが、**写真⑨**にあるように、床見世をはじめ水茶屋や講釈場など、さまざまな施設が建ちはじめ、盛り場化してしまいます。幕府もそれを追認します。

■**江戸一の盛り場、両国**

江戸一番の盛り場は、両国橋西詰です。その対岸、ＪＲ両国駅の南側に回向院というお寺があります。無縁山回向院というように、明暦三年（一六五七）の振袖火事の焼死者を弔うために、増上寺の和尚が開いた寺です。その後も、災害や大事故の死者を弔ってきました。墓碑を見ると、江戸の災害史がよく分かります。国技館も隣にありました。江戸大相撲は、回向院の興業からはじまったそうです。

両国は花火でも有名です。これも享保改革の頃、水難の死亡者を弔うために打ち上げたのが最初です。花火は、現代とは違い、夏の三ヶ月間、毎日打ち上げられました。

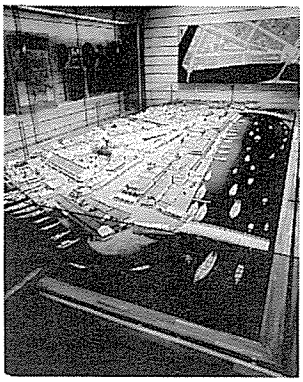
両国橋西詰の盛り場には、子供芝居・三人兄弟芝居など芝居小屋がたくさんあります（**写真⑩**）。いずれも屋根や壁を、下り酒の薦で作っています。水茶屋の上には葭が張ってあります。昼間は日除けになり、夜に巻き上げると花火が見られます。

写真⑪は屋形船です。最後にもうひとつだけ川柳を、

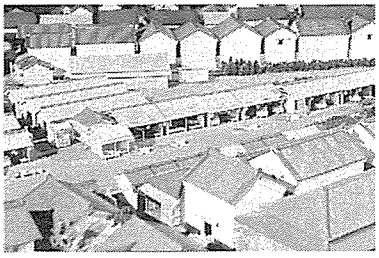
下見れば及ばぬことの多かりき
上見て通れ両国の橋

橋の上から下を見たら、屋形船での桁違いの贅沢ばかりが目に付く。せめて、上を見て、花火で気を紛らわそう、という話です。

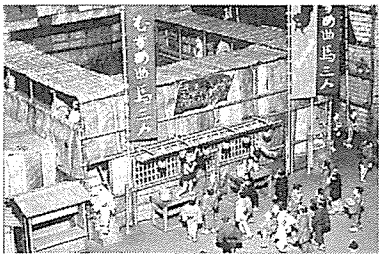
江戸のまちの人々は、狭い住居に住んでいるのではなくて、まちに住んでいました。それは都市だからできることで、しかも一人ひとりが、それぞれの生き方に沿って勝手な方向を向いてくらしていました。それが許されるのが都市の魅力だと、私は考えています。



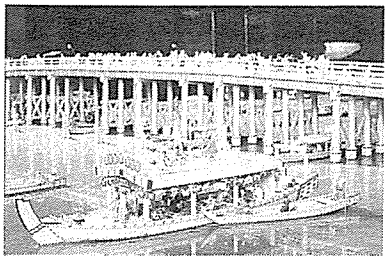
写真⑧



写真⑨



写真⑩



写真⑪

講演（二）
東京の近代の町家と繁華街

初田　亨

■都心の住まい

明治から昭和の初めぐらいまでの間に、東京がどう変わってきたかということを中心にお話をします。「東京の近代の町家と繁華街」というテーマですが、繁華街に時間を多く割いてお話しをしたいと思います。

まず町家ですが、現在は持ち家に住んでいる人が多いと思います。もちろん独立家屋でなくて、マンションの方もおられると思いますが。ところが、戦前までは、ほとんどの方が借家住まいでした。例えば、夏目漱石でも、借家生活でした。いま考えると、ちょっと驚きかもしれないですが、それが一般的だったのです。データによれば、大正一一年には、東京の住宅の九三％が貸家でした。それから約一〇年後の関東大震災後、昭和の初めにも大体七〇％の人が貸家住まいですから、つい最近まで、多くの人たちが貸家に住んでいたということです。

明治の終わりに、音羽に建てられた借家の記録があります。ここには独立家屋から、長屋までいろいろな形式があります。独立家屋はかなり立派で、応接室まで持った住宅もあります。明治になってからも、かなり大きな借家があったことがわかりますし、この傾向はその後も続きます。多くの人が、持ち家に住むようになったのは戦後なのです。

■勧工場という店舗

都市に住んでいた人たちは、勧工場で生活を楽しんでいました。勧工場は、今はありませんが、明治の終わり頃には、東京のにぎやかな場所には、あちらこちらにありました。勧工場というのは、一軒の建物の真ん中を通路にして、その両側に売店のような小さな店が並んだ店舗、と考えてください。そこには、日常的に使う用品から家具を売る店までありました。現在のマーケットのように、いろいろな売り場が並んでいたと考えていただければ結構です。また現在、都心にはデパートが随分あります。いろいろなものを売っているという点では、デパートを考えていただいても結構です。

勧工場が最初につくられたのは、明治の一〇年代です。具体的には、明治一〇年に上野で開催された内閣勧業博覧会がきっかけです。国の産業を高めることを目的に開かれます。民間に、これから売ろうと思う良い商品の展示をお願いし、新しいものや珍しいものを陳列したのです。博覧会が終わった時、売れ残りが出ます。それを出品した人に戻してしまっては、二束三文になってしまう。それでは、産業を発展させようという国の政策にも合わないし、協力した人たちの足を引っ張ることにもなりかねません。それで、東京府が売れ残った品物を常設展示する場所を開くのです。それが勧工場の始まりです。

現在の、新丸ビルの辺りに勧工場がつくられたのが最初です。当初は、東京府が設立したのですが、後に経営を民営化しています。また、その数もだんだん多くなります。例えば、銀座通りや浅草といった繁華街に、いくつも勧工場が設立されます。そのなかに、銀座の帝国博品館、神田の南明館（図①『風俗画報』明治三二年七月号）や東明館（図②『風俗画報』明治三二年七月号）という勧工場があります。

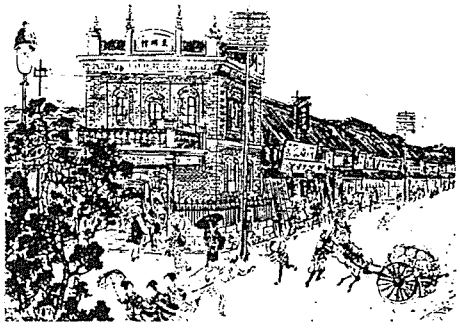
勧工場の大きな特徴は、江戸時代の店舗が座売り方式（図③『東京風俗志』）だったのに対して、陳列販売方式をとっていた点です。店に商品を陳列し、それに値札を付けて販売するのは、現在では当たり前ですが、当時はそうではありませんでした。店に品物を陳列せず、商品は裏の蔵にしま

っておくのが一般的でした。小さな店や品数の少ない店は、店先に商品を展示していましたが、ちゃんとした商店は、蔵にしまっておくのが一般的でした。

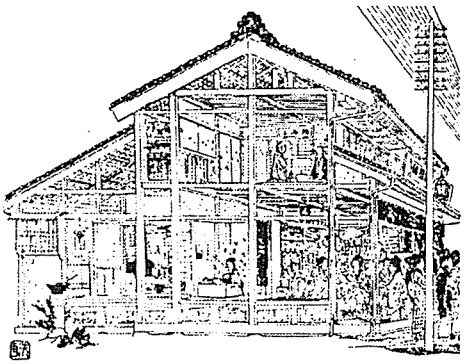
その理由は、江戸時代から明治にかけての、東京など、都市の実状をみれば想像ができます。東京は火事が非常に多かったのです。それは江戸時代からで、何年間かに一回は必ず家が焼けてしまうぐらいの火事があったといいます。商人としては、品物を店に置いていては、火事のときに財産を全部焼いてしまいます。それで、蔵にしまっておくことが続いたと考えられます。東京から火事が少なくなったとき、はじめて陳列販売が可能になったのです。明治の終わりぐらいに、現在の商店と同じ形式をもった店舗が多くなってきますが、その先駆的な役割を果たしたのが、勧工場といえます。

江戸から明治時代にかけての座売り方式とは、売主の番頭さんとか主人が客に座って対応し、客と一対一で話をしながら商品を売る方法です。売る側は、買主の希望を聞きながら、これかな、と思われる品物を頭に描いて、小僧に蔵から持ってこさせていたのです。ですから当時は、蔵からいろいろな品物を持ってこさせないで、客の希望にあった品物を売ることのできる商人ほど、腕のいい商人といわれていました。そういった店が、やがて陳列販売になっていきますが、勧工場は、いち早くそういった陳列販売方式をとった店舗といえます。

図①



図②



図③

■にぎわいを楽しむ

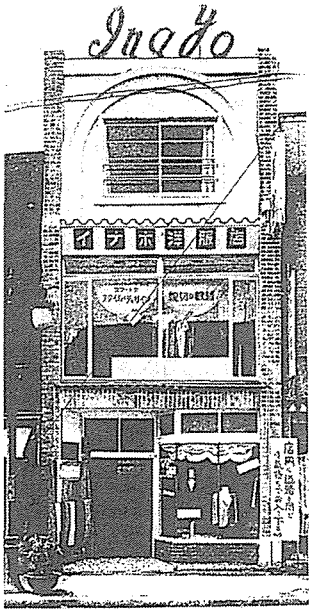
明治の終わり頃、勧工場が非常に増えます。そうすると、不特定の客をより多く店に引きつけないといけません。それで、派手な外観を持った建物が多くつくられます。建物そのものを、看板とすることが考えられるようになったのです。帝国博品館や南明館、東明館がその代表的なものです。例えば東明館（図②）ですが、土蔵造りの建物がずっと並んでいる町並みの先端に、非常に目立つ派手な外観の建物が建てられています。こういった建物が、明治の後半にいくつか出現してきます。

勧工場を訪れた人たちが何をしたかといいますと、物を買いにいくというよりも、勧工場のにぎわいに紛れて楽しんでいたの

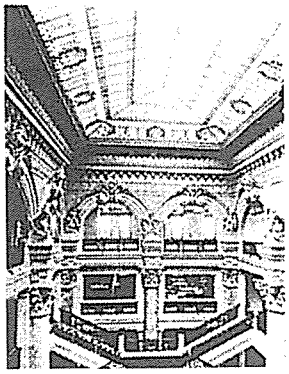
です。当時の思い出を書いた本の中に、そういう記述があちこちに出てきます。要するに、勧工場に物を買いにいくこともあったわけですが、多くの人たちは、そこを訪ねて、にぎわいに紛れることを楽しんでいたのです。

陳列販売の店舗が多く建てられた明治末期頃から、勧工場でのこのような行為は、やがて町歩きを楽しむ行為につながっていったのではないかと考えるわけです。昭和の初めになると、ウィンドウショッピングという町歩きを楽しむ行為は、ごく当たり前になります。商店のなかには、「室内をご自由にご覧ください」という看板を出す店（**写真①**イナホ洋服店『建築写真類聚―商店建築外観集　二巻』）も出てきます。

田山花袋によれば、明治の終わりころの日本橋界隈のすし屋の常連客というのが誰かというと、山の手の人間だ、と言っています。実は、山の手というものが意識され出すのも明治の終わりぐらいからです。日本橋は下町の代表になるわけですが、下町に来るお客が、山の手の人々だと田山花袋は言っているのです。その当時、山の手というのはどの辺りを指していたかというと、麹町とか麻布とか四谷とか本郷辺りです。それが大正時代ぐらいになりますと、郊外住宅地が開発されて、山の手という範囲が非常に広がっていきます。



写真①



写真②

■家庭生活を演出した百貨店

そういった、山の手の人たちをお客にしたのが百貨店です。呉服店が、いろいろな品物を取りそろえた百貨店としてやっていくという、デパートメントストア宣言をしたのは明治末期です。その最初の店が三越や白木屋でした。三越、白木屋がターゲットにしたお客も、山の手の人たちだったのです。

山の手に住んでいたのは、サラリーマンの前身となるような人たちで、新中間層といわれた人です。東京が産業の中心になり、都市で働いて、そこで食べられる人が増えていく。その結果、東京の人口はだんだん増えていきます。地方から流入してきて、役所や会社で働くようになった人たちの多くは、山の手に住んだのです。もちろん下町のほうに住んだ人たちもいますが。百貨店も、そういった山の手の人たちを相手に、商売を始めたわけです。

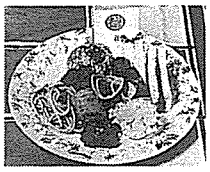
百貨店は、家族連れの客を相手に、彼らが訪れやすい店をつくっていったのです（**写真②**三越の吹抜け（大正三年）『建築雑誌』大正四年四月号）。現在、美術館や劇場を持つ百貨店が日本ではごく一般的ですが、世界的に見ると、非常にまれな存在です。おそらく、日本独自のものといえます。そこには百貨店の戦略があったのですが、同時に百貨店が、どういう人たちをお客にしていったかということと深くつながっているのです。

具体的には、山の手の家族連れが訪れやすい店をつくっていきます。まず、食堂を充実させます。買い物だけではなく、その合間にも楽しめる場所をつくっていきます。お子様ランチというのは、現在、どこにもありますが、それを最初につくったのは三

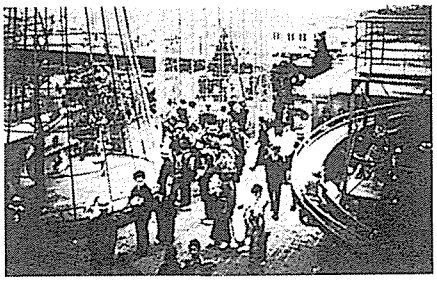
越でした。三越では、子供を連れた家族連れに来ていただくことを大切にして、食堂もお子様専用のメニューまでつくっていきます。その一つがお子様ランチ（**写真③**三越蔵）だったわけです。

もう一つは、屋上を充実して屋上庭園をつくったのです。昭和の初めぐらいになりますと、スポーツランドとか児童遊園（**写真④**松坂屋上野店の児童遊園『松坂屋五十年史』）といったものもつくられています。

さらに三越では、少年音楽隊を結成して、クラシックを聞かせたりするのです。それは、文化的な家庭生活には音楽を聞くことも欠かせないのですよ、という百貨店の側からの、家庭生活への提案でもあったわけです。



写真③



写真④

ほかにも、いろいろな催し物をしています。例えば、大正時代に入りますと、百貨店で美術展が開かれるのがあたりまえのことになります。劇なども見せるようになり、余興場をつくります。それがやがて劇場に発展していくわけです。美術館や劇場がつくられるのは、百貨店が、訪れる人たちのターゲットとして家族連れを意識していたからともいえるわけです。ある意味で、現在の家庭生活というのは、百貨店が演出して、そのうえに乗ってつくられてきたといえなくもないわけです。

■町歩きを楽しむ人々

家庭生活の変化を背景に、都市は次第に変わっていきます。人々が都市の生活を楽しみ始めます。その代表的なものが町歩きで、その行為を支える施設が都市のなかにできてきます。大正の半ば過ぎに、「銀ぶら」という喫茶店が銀座にできています。このことは、この頃に銀座をぶらつくような人たち、いわゆる町歩きを楽しむ人たちがいたことを示しています。「銀ぶら」が定着していくのが大正時代です。さらに昭和の初めには、新宿をぶらつくことが「新ぶら」、大阪の道頓堀が「頓ぶら」、心斎橋筋が「心ぶら」と呼ばれています。神戸では「元ぶら」、京都では「四条ぶら」と、各地に同じような言葉が生まれます。

町歩きを多くの人たちが楽しみ始めた大正時代の末期から昭和にかけて、町の中にいくつもつくられた建物が看板建築（**写真⑤**神田・表猿楽町の看板建築『復興記念写真帳』）です。看板建築の特徴は、店舗併

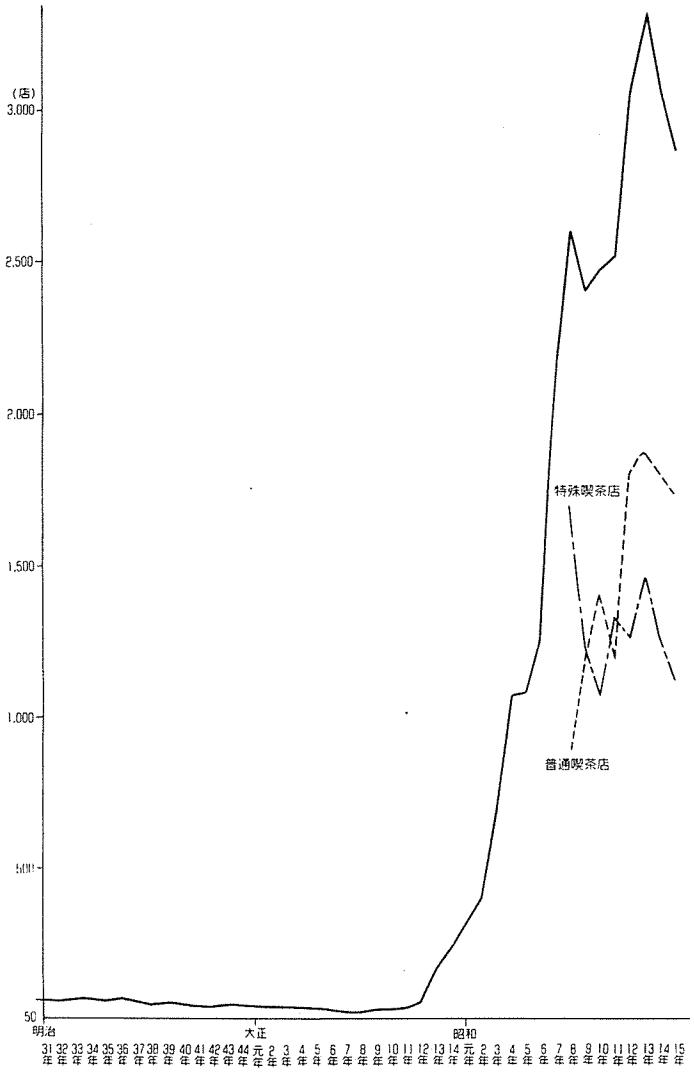
写真⑤

用住宅で、一階部分は、買う人が自分で自由に商品を見ることができる形式を持って、洋風につくられています。しかし、裏側および二階の住まいの部分は、伝統的な形式をそのまま用いています。さらに、不特定の人がお客ですので、人目を引くためにいろいろな装飾が建物の表面につくられています。そろばん屋だとか本屋だとか、建物をみただけで、何を売る店かわかるようなデザインをもってつくられているのも特徴です。

町歩きを楽しむ人たちが、大正時代の後半以降、急激に増えてきます。それを端的に示しているのが喫茶店です。例えば、コロンバン・テラスという喫茶店がありますが、（**写真⑥**『高等建築学22』）ここでは、喫茶店の外にテーブルを出して、そこでもコーヒーが飲めるようにしています。町の変化を見ながら、コーヒーを飲むところができるのです。さらに、町を歩いている人にとっては、コーヒーを飲んでいる人を見ることで、町のにぎわいを楽しめるのです。

写真⑥

東京の喫茶店の数が、急激に増えたのがいつごろかといいますと、関東大震災の直後です（**表①**東京（旧市部）の喫茶店の変遷『東京統計年表』より作成）。昭和の初めに、全国各地で町をぶらつく人たちが増えたということを言いいましたが、このことは、喫茶店の変化を見てもわかります。当時、喫茶店というのは、休憩とか、談話や待合せの場として使われていたのです。その喫茶店が増えたということは、それだけ町歩きを楽しむ人たちが増えてきたことを意味しています。都市に住む人たちが、都市の楽しみというものを発見していったわけですが、その一つが、町を歩くことだったのです。町の中を自由に歩き、にぎわいに紛れることの楽しみを発見したのです。



表①

講演（三）
昭和初期のアパートメントハウスとライフスタイル

大月　敏雄

現在我々は東京に住んでいて、多くの集合住宅と呼ばれるビルディング・タイプの一種に囲まれながら、あるいはそこに住みながら暮らしているわけですが、果たしていま我々が普通に見ている、そうした集合住宅というのはどのように発生していったのかについて、東京を中心に簡単に話をさせていただこうと思っております。

■社宅としての集合住宅

集合住宅の原点を考えた場合、一つには江戸時代の長屋というビルディング・タイプが、集まって住む形として出てきますが、明治時代においては日本全国に行き渡った産業革命の中で企業がどんなふうに社員にハウジングを行っていくかということが大きなテーマになって、まず社宅という形で現れてきました。明治三六年に農商務省官僚によって『職工事情』という報告書が出されますが、この時期、社宅がハウジングの問題としてクローズアップされます。一例として倉敷紡績の社宅をあげることができます。社員の社宅を明治の中盤ぐらいから一生懸命つくった同社の社宅は平屋建ての長屋団地でした。これは近代における集合して住む形のかなり初期の例だといえます。

一方で、我々がいま普通にアパートだとか集合住宅と呼ぶような形が出現するのが大体明治の末ぐらいで、有名なものとしては、丸ノ内の一丁倫敦があります。これは三菱がつくった、主として煉瓦造のオフィス街なのですが、その中の六、七号館に三階建ての建物が出来ています。これは、基本的には長屋建てになっておりまして、下から上まで一つの家族が住んでいました。これも社宅の一種といえると思います。あと、社宅として集合住宅で有名なのは長崎の軍艦島と呼ばれている所で、島の地下の炭坑で働く鉱員のために建設された一連の住宅群があります。ここでは、例えば大正五年にはすでにグラバーハウスという鉄筋コンクリート造の建物が建てられています。

こうして明治末から高層・高密で人々を社宅として住まわせるというような方向性での集合住宅建設が日本の中で経験されてくるわけです。

■民間による高等下宿

そうした社宅という形で人々が密に住んでいく一方で、明治時代の終わりから大正時代にかけて、いわゆる高等下宿という形で、都市に住むちょっと金持ちの大学生・独身者たちが、便利で快適な都市生活を過ごすために、いまでいうところの木造のアパートが盛んに建設されます。東大の近くにある明治三八年に建ったといわれる本郷館はいまも遺っていて、真ん中に中庭を取って、共同玄関の脇に管理人がいて、靴を脱いで上がって、和室が一室か二室あって、各部屋にアプローチする。中庭に面して共同のトイレなどがある。そういうのが三階建て、四階建て、として多数建設されました。中には明治四三年の上野倶楽部という五階建てのものが上野池之端に建っていました。このほかにも大正三年の菊富士ホテルや大正八年の牛込芸術倶楽部が有名です。

これらの高等下宿は、それまでの民間集合住宅である長屋とは異なり、特に独身の人がどうやって都会に定着していくかということが模索された結果、木造ではあるが重なって上に住んでいくという形式に到達したと考えています。

■公による集合住宅

こうした民間の取組みに対して公の取組みはどうかというと、まずは最底辺の人々の暮

らしをどうやって底上げしていくかということが考えられたのです。日本におけるパブリック・ハウジングの初めてのものは、おそらく明治四四年に辛亥救済会が建設した玉姫公設長屋がそれに近いのではないかと考えています。それは前年に浅草で起きた大火災に寄せられた義援金をもとに東京府が辛亥救済会という外郭団体をつくって、火災で焼け出された人々向けに、長屋を並べたような団地を造って救済するというような仕組みが出来たのです。もちろん明治後期には、横山源之助が『日本之下層社会』を著したり、大正時代になると東京市社会局が盛んに東京の不良住宅地を調べて、それをどう改良していくかが模索されたわけですが、たまたま大火災というのを契機にして託児所や浴場や店舗付きの団地が形成されている。これを見ると、ただのハウジングではなくて、社会福祉的諸施設をセットにした町づくりがが明治のいちばん最後に取り組まれたことが判ります。

公的セクターが本格的にハウジングに取り組むきっかけは、大正時代の米騒動を契機に設置された救済事業調査会の答申「小住宅改良要綱」でした。これで当時の東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸といった六大都市で、いわゆる公営住宅というのが始まっていくわけです。東京において有名なのは、月島住宅で、これは関東大震災で全部燃えてしまったのですが、震災後に建てたものが現在も残っています。

中でも特筆すべきは、大正一二年の関東大震災の前に、東京市が深川の古石場に建設した鉄筋コンクリートブロック造三階建ての集合住宅です。ここで面白いのは、古石場住宅には三つの住棟型式があって、その内の一つは、各部屋が大体一部屋で中廊下と共同便所が付いています。これは主に単身者向けの賃貸アパートだったわけですが、これと同時期に建った同団地内の別の住棟は階段室型の二戸一形式で、室内から便所に行くのに一度階段室を経なければいけない。さらに、震災後に建設された三つ目の住棟形式では、便所が室内に入っています。このように集合住宅の最初期のものを見ると、どんなふうに便所と付き合っていくかというようなことが模索されています。

■関東大震災とアパートメントと同潤会

実は、震災前から計画されていた洋風のアパートが一つありました。有名な御茶の水文化アパートメントです。アメリカ人のヴォーリズが設計したのですが、これは着工しようとしたときに震災が起こって、結局、震災直後に竣工しました。当時の知識階級の人々の一つの理想は、生活そのものを全く西洋化すること、即ち、ベッドで寝て、食卓で椅子に腰掛けて食べて、畳の部屋は要らないというようなものだったのですが。その理想をアメリカ人建築家に頼んで実現したのがこの文化住宅だといえると思います。またこのアパートは政府からの低利融資を受けており、そうした意味では「公的」集合住宅の一つだとも言うことができると思います。

この文化アパートが建設されている最中に同潤会が設立され、日本における集合住宅のエポックを画するわけですが、同潤会はアパート以外にもいろいろな事業をやっております。例えば、初年度の大正一三年には、いまでいう仮設住宅を二千戸ほどつくっています。阪神大震災なんかでつくられた仮設住宅と違うのは、住宅地の中に店舗や銭湯があるのです。阪神大震災の仮設では、住宅しか造らないものだから、仮設住宅の周りに屋台なんかが出来ることによって日常生活がサポートされていましたが、少なくとも大正末期までは、町は住宅だけでは成り立たないという極めて真っ当な常識が生きていました。これは、前述した辛亥救済会の公設長屋にもいえることです。

その後、同潤会はアパートメントハウス事業に手を着けるわけですが、東京と横浜で全部で一五カ所のアパートが建設されました。これらのアパートは大雑把にいって三種に分類できると思っています。山の手型のアパートと下町型のアパート、それから都心型のアパートです。

山の手型のアパートとしては青山アパート

と代官山アパートが考えられますが、これらは当時の東京周辺部に一種の田園都市というような感じで、小振りな住棟でゆったりと中庭を囲んで造られています。

一方で、中之郷アパート、柳島猿江アパート、清砂通りアパート、あるいは厳密にはアパートではなく共同住宅なのですが猿江アパートとそれに隣接する東町アパートといった下町型のアパートは、いずれも隅田川の東部に位置し、震災復興の区画整理に対応する形で設計されています。また一階に必ず店舗併用住宅を持ち、店舗併用住棟を街路に面することによって都市景観を形成するという極めて都市的なアパートが出来上がっております。

あと、都心型がありますが、これは比較的小さい敷地の中で、中庭も最小限に切り詰めた形で配置されています。かつて横浜に建っていた新山下、平沼の両アパートや三田アパート、鶯谷アパートは狭小中庭を高密に取り囲む配置を特徴としており、女子独身者を対象とした大塚女子アパート、時期的・技術的に同潤会アパートの集大成であった江戸川アパートもこの分類に入ると思います。また、上野下アパート、三ノ輪アパートは狭小敷地に申し訳程度に前庭を付けて敷地一杯に建てています。さらに、建蔽率ほぼ一〇〇%で建てた虎ノ門アパートが都心型の極めつけだといえますが、これは後に全て同潤会の事務所に改装されました。

■同潤会以外の戦前公的集合住宅

同潤会以外に震災復興後のアパートとして有名なものとして、現在も残っている九段下ビルがあります。これは東京市が支援してつくった復興建築助成株式会社の助成による、焼けた町家の共同化でした。プランを見ると一軒一軒の間口が違います。土地の権利をいじらずに、町家が震災前に建っていた姿のままに壁を立ち上げて、それを不燃化して共同化していくというような興味深いつくり方です。一、二階は、住宅の内部に階段があってメゾネットを形成しているのですが、三階は別の共同階段からアクセスして、それを他人に貸すこともできるような、斬新な発想でつくられています。

そのほか、前述の不良住宅地区改良事業によるアパートも東京府、名古屋市、大阪市、神戸市でも同様に取り組まれました。これらのほとんどは既に新しい公営住宅に建て替わっていますが、最後まで現存する大阪市営日東下寺住宅は現在再開発中です。他にもいろいろな公的アパートが展開します。東京市営では、古石場住宅の次に真砂町に清和寮という男子寮が出来ております。また官舎としては、竹平寮という憲兵隊の下士官アパートというのが九段下にありました。

■高級アパートと新しいライフスタイル

このように同潤会アパートをはじめとする公的アパートが新たなビルディングタイプとして短期的に集中して東京でつくられた結果かどうかは判りませんが、昭和五年から昭和一〇年ぐらいにかけて多様な民間のアパートというのが供給され始めるわけです。有名なものとしては、九段下にあった土浦亀城設計の野々宮アパートや銀座にある川元良一（もと同潤会建設部長）設計といわれる銀座アパートがあります。そこの居住者像として、私が見たり聞いたりした中では、例えば同潤会の中でも、青山アパートに住んでいて代官山が出来たからそこへ引っ越した人や、青山アパートに住んでいて江戸川が出来たから江戸川に引っ越した人、あるいは御茶の水アパートに住んでいて野々宮が出来たので野々宮に引っ越した人というような、いわゆる都市の最先端のライフスタイルを追い続けているような人たちがこうしたアパートの居住者の一部を構成していた事実は見逃せません。

それを属人的に見ていきますと、例えば御茶の水文化アパートは、野々宮アパートを設計した土浦夫妻が暮らしていたり、あるいはこれは松山巌さんの『乱歩と東京』という本に書いてありますが、明智小五郎が御茶の水にある「開化アパート」に住んでいたとか、有名人ですと、代官山では女優の水の江瀧子、青山では野球のスタルヒン、清砂通りでは政治家の浅沼稲次郎、大塚女子では、これは戦後ですが、作家の戸川昌子、同じく戦後で柳

島アパートには俳優の児玉清、野々宮アパートには岡田嘉子、江戸川アパートはたくさんなので割愛しますが、このように同潤会は復興事業で造られたにもかかわらず、他の民間高級アパート同様、都市のハイカラな、あるいは文化的な最先端を担った人たちがこぞって生活するような場所であったということがこれで理解できると思います。

■アパートメントブーム

そういういわば最先端のライフスタイルとアパートメントという新型ビルディングタイプのセットが、表①に示すようなアパート・ブームを惹起したことが複数の文献から読みとれます。表①は東京市内のアパートの年毎の建設量を示していますが、昭和五年から九年まで二次曲線を描いているわけです。こうした状況はアパート・インフレだとかアパート・ブームと呼ばれました。アパートメントの実像より華やかな印象がアパートという言葉に託されるようになった結果、それまで存在していたただの木造長屋の看板を付け替えて名前だけアパートとした例も大変多かったわけです。その内訳を見ると、初めからアパートメントであるのが八五〇件であるのに対して、例えば普通住宅をアパートにしてしまったのが一〇二件とか、下宿・旅館をアパートに変えたのが二七件とか、中には学校や遊郭をアパートにしたものもあります。そうした中で、昭和九年に高田保が「アパート氾濫時代」という非常に面白い文章を、雑誌『改造』に書いています。断片的に引用してみますと、

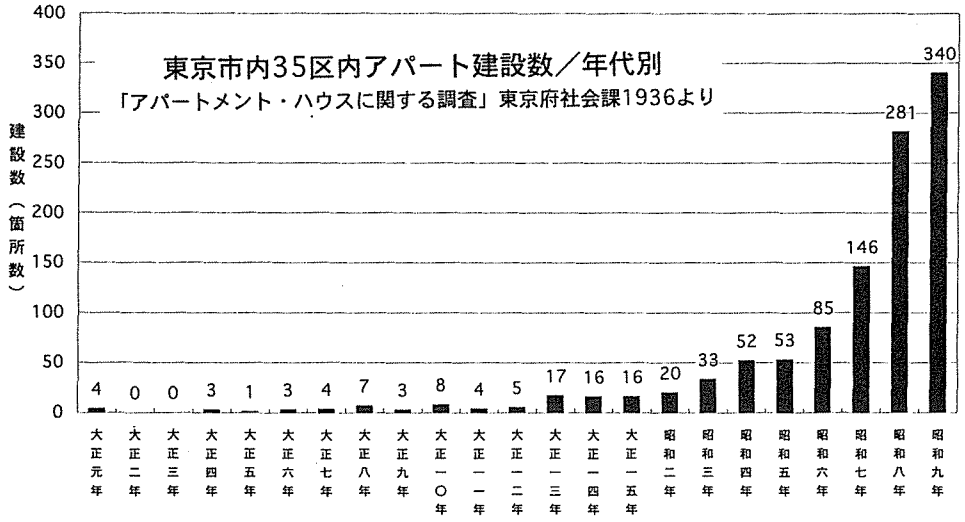
「アパートじゃなくて、『アバート』っていうのがあります。」

これは東京育ちの人特有の癖で、当時のデパートも「デバード」と呼ばれていたそうです。つまり、教養のない人はアパートではなくアバードと呼んでいた、ということの指摘であります。

「アパートは高いがアバートは廉い。嘘と思うんならまず本所深川へいってごらんなさい。みんなアバートでさあ。空室ありっていう木札が雨風にさらされながらぶらさがっているんだが、なんの事はない貸間長屋で、一間三畳が月に二円五十銭ぐらいで、というんです。」

これはまさに名前だけのアパートが氾濫していたことの証明です。

「以前なんたらいう男爵が、生活改善のためというんで、文化という二字を頭にかぶせて立派なアパートを建てたようでしたが、生活なんていうやつは、改善だの改悪だので変わっていくもんじゃありません、追ったてられて仕様ことなしに変っちまうもんです。たとえばですね。夫婦共稼ぎという一軒で、何よりも欲しいのは、簡単な戸締り一つで簡単に家を空っぽにしていけるっていう事でしょ



表①

う。こういう一軒が今じゃ千軒になり万軒になっているんです。アパートの方が経済だからなんていうのが理由じゃありませんや。この方の便利からまず繁昌しているんでしょうね。」

これはお茶の水文化アパートの理念を皮肉ったものです。アパートメントへの要求は文化生活・生活改善のための手だてではなく、夫婦共稼ぎで家が空になってしまうという、まさに都市的生活の要求から必然的に生じるものであることを喝破しています。

「私の考えることは、アパートの中で生まれてアパートの中で育った子供ということですよ、どんな人間が出来るでしょうかね。」

この疑問は、戦後本格的に出発して三〇年そこそこしか経っていない我々の、集合住宅に囲まれながら、あるいはそこで暮らすというライフスタイルのあり方を再び問うているように感じられます。

■その後のアパートメントの展開

このように普及してきたアパートメントという新しいビルディングタイプの普及は昭和二桁に入り、急速に減速します。まずは資材統制制令などによる建設物資の制限、それから労働力を戦場で消費しなければならないという現実が、集合住宅のみならず、普通の住宅建設もままならない状況に日本を追い込んでいきました。従って、これは全ての分野でいえることでしょうが、日本では昭和二三年の都営高輪アパートまでほぼ一〇年間、集合住宅の進展にブランクがあったわけです。

ただ、戦前に建設された東京のRCアパートの大部分は戦後も残りました。空襲で丸焼けになったアパートにも人はすぐ住み始めましたし、焼けなかったアパートも引き続き住みました。このほかにも敗戦直後はRCの学校や焼けビルに集団で暮らすという現象が生じましたが、これは「転用」という形での集合住宅の発生と捉えてみることも可能かもしれません。一方で、進駐軍はワシントン・ハイツやグランド・ハイツという極めて解り易い形で、洋風の合理的ライフスタイルを日本人に示しましたが、このことがその後の日本人の目指す住宅像を大きく規定したことについては、もっと研究されてよいと思います。ただ、このとき野々宮アパートが接収アパートとして再生されたり、旧満鉄社屋が接収アパートとして転用されたことも、東京における集合住宅の重要な一ページだと思います。

そして昭和二三年の都営高輪アパートを皮切りに、戦後のアパートの本格供給が始まりますが、現在の住宅供給公社の前身に当たる、いくつかの地方公共団体の住宅協会や住宅公社では、昭和二五年あたりから、一階に商店の付いた市街地共同住宅が戦災復興住宅の一種として同時多発的に取り組まれます。戦後公営住宅の標準設計化が進む片方で、地方独自の都市型住宅のあり方が模索されたことは、非常に大事なことであったと思います。

その後の集合住宅は公営住宅・公団住宅の標準団地型のタイプと、民間で造られる木賃タイプの集合住宅が一挙に建設されていくわけですが、そうした中、昭和三〇年あたりから都市居住を謳歌するために、どうやって都心に高く重なって住んでいくかということが民間の方から追求され始めました。公団でも同時期に民有地の共同建て替えである「市街地共同住宅」に取り組みましたが、それはそこで営まれるライフスタイルと一体となって供給されたものではありませんでした。昭和三〇年あたりから民間で追求された一連のハウジングは、デラックス・アパート・ブームと呼ばれ、高級賃貸集合住宅が続々と出現しました。例えば東急代官山には俳優の渥美清、日活アパートには映画監督の川島雄三や女優の山口淑子などが住んでいることで有名でした。他にも東急三田アパート、原宿アパートメント、セントラルアパートといった有名人が住むアパートが供給されました。

こうした都心に住むことを謳歌しようという動きはまさに二〇年前のアパートメントブームの再来とも言えます。それは昭和三九年のオリンピック時に始まる原宿のコープオリンピアをはじめとする第一次マンションブームや、現在の都心回帰ブームに至るまで再生産されているといえます。

講演（四）
近代東京の下町

森まゆみ

三人の研究者の精密なお話の後では、私の話はちょっと雑漠な話になりそうです。

波多野先生の講演で、江戸時代は七〇％が武家地で、残りの半分ずつくらいが寺社地と町地であったとありました。その構造は、そのまま引き継がれていると思います。

私は文京区の動坂という所で生まれて、現在その近辺の谷中・根津・千駄木、文京区、台東区、荒川区、北区の区境の地域で、地域の歴史の掘り起こしと、記録づくりに一八年間携わっています。

加賀百万石の大名屋敷は東京大学に、水戸屋敷は東京大学農学部になっています。武家地は大きな公共的用地となりました。水戸の後楽園や柳沢吉宗の六義園のように、そのまま庭園として残っている場合もあります。寺社はほとんど残っています。そして、高台の武家地の跡は山の手のお屋敷町になり、低地の町人地には、狭隘な所に、いまだに商工業者が密集しています。

陣内さんから、「谷中が下町であるかどうかわからないけれども」と注釈がありましたが、確かに谷中は下町とは言えないと思います。私どもの地域雑誌「谷中・根津・千駄木」は、「主婦のタウン誌、下町情緒」と紹介されて、定着しているようですが、主婦も、タウン誌も、下町も、全部異義を唱えたいのです。下町は、波多野さんの説明のように、江戸からの町人地で、日本橋や神田などが典型的だと思うのです。浅草はもっと昔から、浅草寺を中心とする集落がありました。日本橋と神田、あるいは深川や本所にしましても、生活も言葉もそれなりの違いがあります。

私どもの所は江戸では、「場末」と言ったほうが適当だと思います。そして、そこに神田から追い出されてきた寺が密集して、谷中の寺町をつくりました。初田先生は第一の山の手は本郷であったとおっしゃいましたが、上野台との間の根津の谷には職人さんがたくさんいました。江戸時代、根津神社の門前に、私娼窟、岡場所ができました。岡場所はしょっちゅう取り払われたり、再生したりしていました。それが明治になりますと、遊郭として公許になって、明治二〇年の六月まで存続します。

私の両親は浅草と芝で、昭和二〇年の空襲で焼け出されて、焼けなかった町、千駄木で世帯をもったのです。東京の大空襲では千駄木の半分くらい、根津と谷中はほとんどが焼け残りました。その前の震災にも焼け残ったのです。その当時からの町が両方の災厄で焼け残ったというのは少ない。ですから、震災以前の建物がたくさん残っています。そうした古い民家も近年、バブル期には相当壊されて減ってきています。

私の家は、借地の上の二軒長屋でした。隣が大家さんで、一五坪くらいでした。下見張りの二階建てで、上に瓦屋根が付いていました。そこに住むのがすごくいやでした。ネズミは出るし日は射さないし。お友達が来ると、雨漏りがして恥ずかしかったことを覚えています。

一〇歳のときに東京オリンピックがありました。このとき、他の町はどんどんきれいになり、青山は道が拡幅され、ビルが建ち、高速道路ができ、いいなと思いました。

一方、私の町は相変わらず古い下見張りの瓦屋根の町でした。昭和四〇年代に地下鉄の千代田線が開通して、多少便利になりました。根津と千駄木の駅ができたのです。それまでは、谷中も根津も千駄木も、ほとんど人に知られないひっそりした町でした。いまだに谷中はバス停しかありません。谷中は、谷中墓地、谷中ショウガ。よく飲屋さんに行くと、壁に「谷中」と書いてあり

ます。大正の末期まで谷中本、いまの日暮里の駅前辺りでショウガを作っていて、それが土地の名産になっていたようです。

私は大学を出て、結婚をして子育てのために、自分の町に戻りました。そのとき初めて、この町が特殊な、良いか悪いかは別として、古い建物が残っていて、お位牌とか文書とか絵草紙とか、町の物語とか、いろんなものが残っている。でもその記録がほとんどない。暇だったこともあって、じゃあこれを残すというか、記録しようということで、一九八四年の秋に地域雑誌『谷中・根津・千駄木』を創刊したのです。

地域を写真で紹介します。

写真①　私どもの地域は、千川上水が引かれた形跡はあるのですが、基本的には、江戸時代に水道は通っていなくて井戸水だったようです。それで、いまだに井戸があって、二六〇くらいの数を確かめています。大方がよく使われています。お寺にある深井戸は水質が良く、そのまま飲めます。ポンプ井戸が多いのですが、いまでは珍しいつるべ井戸もあります。

路地の多くは未舗装でドブの遺構が残っています。奥には必ずといってよいほどお稲荷さんがあります。火伏の稲荷といって、井戸とセットで火事から路地を守ります。

火事は出さないことが大事で、谷中は火事がない町だと各町会が自慢にしています。一八年間に、ボヤが一、二回ありました。木造密集地域ですから、行政は道路を拡幅して消防車が通れるようにしたいのですが、権利関係が複雑でできません。

写真②　明治には、地方から出てきて家作を建てることが成功の証でしたから、一生懸命家作を建てる。そして、そこに間借人や居候、更に間借人が学生に貸したりして、権利関係は四重構造くらいになって、建替がなかなかできません。写真の奥の左側にクリーニング屋さんとお稲荷さんがあります。手前には子育て地蔵があります。

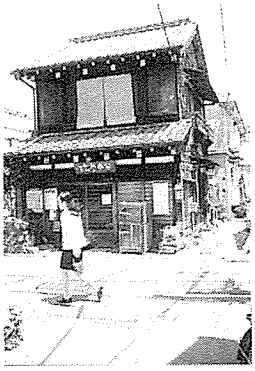
ここでは、緑地や庭が持てないので、家にへばり付くように、たくさんの植木を植えています。植木の種類は、ユースフルというか、有用植物、それとエディブル、食べられる植物が多いです。例えばトクサ、ユキノシタ、ゲンノショウコのような薬草、アロエのように蚊に刺されたら塗るといったもの。刺身のツマみたいなもの、シソとか、木の芽、細ネギとか、です。

写真③　明治四〇年代に建てられた典型的な町家です。現在保存修復されて、谷中学校というたまり場になっています。かなり勾配の急な瓦屋根をもつ、出し桁、出桁とも言いますが、出し桁造りです。下はガラス戸、二階は障子戸が見られます。

写真④　「花重」という、明治三年の建築で、江戸の大工が仕事をしています。谷中墓地の門前のお花屋さんです。ツシ二階という二階が非常に低い瓦屋根の民家です。

写真①

写真②



写真③

写真④

写真⑤　大正三年の建築で、木造三階建ての民家です。もとは三田の爪皮屋さんの建物でしたが、持主が代わり、現在は串揚げ屋さんで繁盛しています。魅力ある建物で、最近国の登録文化財に登録されました。

写真⑥　染物の丁子屋さんです。前に藍染川が流れていて、その水を洗い場で使っていました。どんな職業がどんな要件でそこに建っているかがよくわかります。

写真⑦　池の端の谷中清水町にあるきれいな町家です。わずかばかりの土地にも植木を植えています。右側は木工の職人さんの家です。

私どもの地域は、もともとの江戸っ子というか、何代も続く方もいるのですが、多くは信越本線とか東北本線で東京に出てきた方です。西から来た人は、鎌倉、逗子、品川などの西に近い所に住む。維新の志士たちは、品川辺りで遊びましたし、新橋の花柳界は明治以降、成り上がった高官、薩長藩閥政府の人たちにひいきにされて栄えました。一方、「新柳二橋」と言われた柳橋は、旧幕臣系のお金のない人たちが集まり、錆れていったのです。最初は柳橋が格が上だったのですが、だんだん新橋の勢いが押されていきました。西のほうから、東のほうは押されていったような感じがあります。

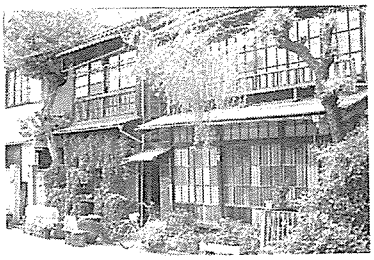
路地には、東北や北海道の出身者が多く、その人たちが一つ一つの長屋の一軒一軒に長い時間をかけて熟成したというか、コーポラティブに住んでいるという状態です。

写真⑧　生粋の根津っ子で、頭（かしら）の小山さんの家のなかです。物干しのようなものを自分で作って、波板で囲って、洗面所兼洗濯場所としています。歯ブラシがきれいに並んでいます。家の外観は頭ですから、足場の丸太が入れてあります。

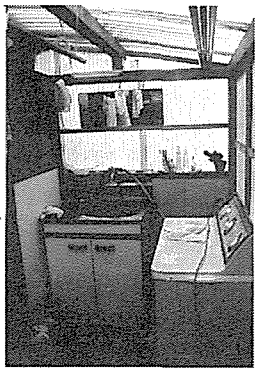
どの家もそうですが、本当に狭いです。私の家も非常に狭く、家は狭いけれど心は広かったという感じがします。よその家も、自分の家のように使うことができます。お話を聞きに行くと、おばあちゃんが冷蔵庫の物を出して、お茶を飲ませてくれます。

資料を返しに行ったとき、そこの家の旦那さんのお葬式でした。「おばあちゃんはどこですか」とたずねましたら、「疲れたから、隣の家で寝てるわよ」と。隣の長屋でお休みになっている。子どもたちもよその家で、おじいさんと一緒に昼寝をするということがいまだにあります。

写真⑤


写真⑥

写真⑦


写真⑧

写真⑨　賄い付き下宿の最後の形態である「真正館」です。弥生町にあって、東大の学生さんが何人かいましたが、残念ながら、二、三年前に壊されてしまいた。

写真⑩　路地の右側は明治末期の長屋があるのですが、問題は左側のこの家です。ここは、大家さんが土地を大蔵省に物納か何かをしたのです。その土地を買って建て直しています。塀を建てて、ここまでは自分の家だぞと。昔ですと、この路地の倍の広さがオープンスペースとして機能して、お年寄りの立話や日なたぼっこ、子どもたちのビニールプールでの水遊び、ゴザを敷いてのおままごとができたのですが、土地の私有によってできなくなってしまいました。

昔は、路地のお稲荷さんと井戸を中心にこっち側を向いたコミュニティがあったのですが、場所によってはこの塀のようなことがあると、路地が裏側になって、反対側のもう一つ通路、それが表側になって、コミュニティの分断も起こってきています。

写真⑪　ちょっとキッチュな感じの装飾のブリキ屋さんです。いわゆる出し桁です。

写真⑫　この池は路地の奥の崖下に住んでいる人が湧水でつくっています。ホテイアオイを育て、金魚やコイを飼っています。東京の都心にこういう所がまだあるのです。

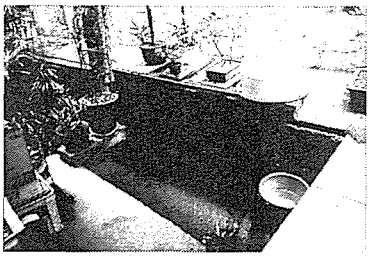
写真⑬　路地の清掃当番が一週間単位であります。それに、物の貸し借りもかつては行われていましたが、いまは「そんな貧乏じゃないわよ」と言われてしまいます。つまり、かつては貧乏だったと思われます。テレビでは、非歴史的に、「下町は人情ですね」と言うのですが、下町に人情があるのは、貧しく互いに助け合わなければ生きていけなかったから。お米やおみそが買えない、塩が足りない、そういうときにお互い助け合って生きてきた。それが、そのコミュニティの密接さをつくり出しています。

写真⑨

写真⑩

写真⑪

写真⑬



写真⑫

写真⑭　「ゴミを勝手に出さないでください。組長」と書いてあります。何か違うほうの組かなと思いますが、戦前からの隣組がいまだにあるそうです。

写真⑮　格子戸があります。昔はここに、斜に「貸家あります」という札があって、自分で「貸してください」と言うのです。樋口一葉も、竜泉に小間物屋を出すときに、自分で出掛けて、貸屋の札を見て、隣近所の人に、どんな大家さんで、いくらで借りられるのかと見聞をしています。家を借りるのが簡単だった時代です。

写真⑯　谷中銀座の漬物屋さんです。自分で漬けたものを計り売りをしています。小銭は篭のなかで、ちょっと前までは裸電球でした。こういうお店がまだまだあります。

私の子供の頃まで、郷党といって、地方から出てきた人は、前に出てきて成功した人や縁故者を頼ってくるのです。同郷の人のネットワークが生きていたのです。私も母方が山形県の鶴岡、父は宮城県の南にある丸森ですから、鶴岡や丸森の関係の会合があったり、親戚や知合いがよく来ていたようです。県人会は、コミュニティをつくる一つの要素です。同業者というのもそうです。床屋さんとか、豆腐屋さん。豆腐屋さんの屋号は武蔵屋とか越後屋が多く、お風呂屋さんをやっている人は越後、石川、富山辺りの方が多いようです。郷土の先輩がそれで成功すると、見習って、手伝っている店からのれん分けをしてもらって増えていきます。

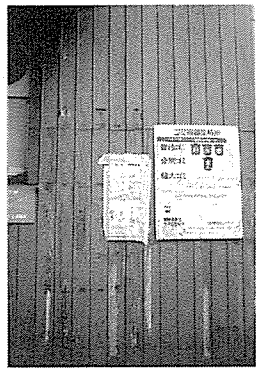
楽しみは、いまはもうないですが、町に寄席があったことです。お風呂屋さんがあって、お寺の縁日があって。一葉はしょっちゅう勧工場へひやかしに行っていたようです。見る楽しみがあったのだと思います。

長屋にはお風呂がない家が多いのです。お風呂はあそこに貸してある、庭も貸してあると言うのです。楽天的な、人のものを自分のもののように使う。長屋は、一戸一戸は狭いのですが、八軒なり一二軒なりを一つの自分の家にして使うのです。お年寄りなどは、ある家でお茶飲み話をしていて、日が陰ってくると、まだ日がある隣に移るのです。次々に日の当たる所に移ってお茶を飲み続けるのです。

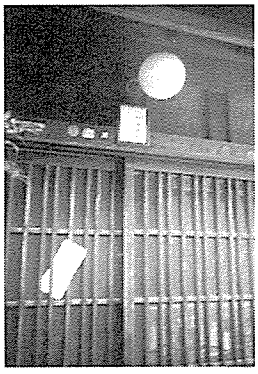
防火については、火事はソフトの知恵で出さない。出したら大変だというので、火の用心は冬中やっています。火事を出すと、ここを出て行かなければいけないというような、不文律があります。

泥棒に対しては、夜中の三時に寝る人、起きる人がいて、路地は、一晩中誰か、寝ずの番がいて防犯的に安心です。

近代下町の居住の一例を申し上げました。



写真⑭



写真⑮

写真⑯

講演（五）
東京の都心に住む

東　孝光

私は、現代の東京青山に住んでいる生活者として報告を申し上げたいと思います。青山というと、時代の最先端を行く場所だと思っておられるかもしれませんが、実は、暮らしということでは同じです。ただ、時代の先端をいくような分だけ、なくなっていく部分も多いことは確かです。それを努力で補って、みんなで助け合って住んいくことだと思います。

■都心居住と私の生い立ち

私が生まれ育った大阪の古い町中の暮らしを少し紹介します。**写真①**は、私の育った家ではないのですが、このような平家建てに狭い二階が乗っている大都市の路地の奥の町家で育ちました。

大学を出て、いろんなところで修業をした末、東京で独立して建築家の仕事を始めました。それからかなり後、今から二〇年くらい前に、大阪の大学に教えにきてほしいという話があり、大阪の町に戻りました。**写真②**は、その時、古い町の面影の残っている天王寺、上本町、住吉あたりに出かけて、自分が生まれ育った町の雰囲気に近いところを写したものです。家の中から木の枝が細い路地まで伸びていて、地面は土のままで、まだこんな所が残っていたのかと、少年時代の思い出がたちまち蘇ってきて嬉しかったことを覚えています。私は大阪の都心で育ちましたが、コンクリートジャングルと表現されるようなところではなく、緑も水もいっぱいの都心環境でした。

終戦直後、私は小学校六年生でした。中学、高校と進んで、その頃にアメリカ映画を見て、建築家を志しました。当時は、みんなアメリカ文化に憧れたもので、映画ではガラス張りピカピカの高層ビルがどんどん建っていく。一人の建築家の才能でそういうことができるんだという大きな誤解をしながら、大学の建築科に入学しました。

卒業して郵政省建築部に入りました。小さな町や村にまで郵便局を建てていく。戦災で焼け落ちた町を復興していく時期でしたので、そんな建築をやりました。次に、坂倉準三という、フランスのル・コルビュジエという大建築家に師事した先生の所に入門しました。そこでは、大きな公共建築の設計方法を勉強しました。私自身も担当者として、高等学校や市庁舎等の設計図を引き、工事現場で監理をしました。

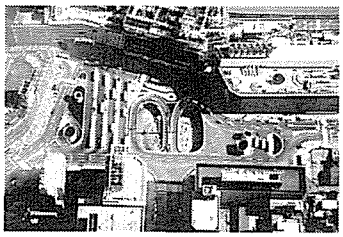
このとき従事した市庁舎は、ついこの前、関西の保存近代建築の一つに選ばれました。関係者で生存しているのは私一人だけで、設計当時の話をしました。四〇年くらい前の建築ですが、自分ではそんなに経っていないように思えます。谷中にある建築が次々になくなっていくのが残念だと森さんもおっしゃるのですが、近代建築にも、二〇年、三〇年で存在が危うくなるものがたくさんあります。経済効率のために建てたものは愛着がもてなくて、やがて経済効率のために滅びていくのかな、と思います。

写真①

写真②

■東京に住みついた頃

東京に出てきて、新宿駅の西口地下広場という事業（写真③）を、デザインの担当者として、坂倉ティームを率いて参加しました。この事業は大きな仕事で、周りにビルがびっしり建ち並び、そのビルの間を全部掘り返して地下からつくるのです。当時、坂倉先生のアトリエが、赤坂桧町、防衛庁のすぐ隣にあって、そこから新宿まで通いました。東京は真ん中に皇居があって、東側に森さんのお話の谷中があります。私はどうも皇居の西側に縁が深かったのか、アトリエが赤坂で、工事現場が新宿で、その中間の千駄谷が東京の仮住まいでした。事業の途中に、東京オリンピックがあって、開会式の歓声を外で聞いたり、中でテレビを見たり、そんな暮らしをしていました。



写真③

地質地図を見ますと、東京は洪積層の古い台地が水で侵食され、細かなしわやひだがたくさんできています。そのひだの低い所から高い所への落差が坂道や崖になっています。そこは、家や畑に利用できないので、樹木が残っていて、大阪と比べると、全体的に緑が多く、起伏に富んだ地形になっています。そんなところに私はすっかり魅せられたというか、こういう所に住めるといいなと思ったわけです。しかも都心のもっている人との出会い、買物の便利さ、文化的な刺激など、都心の本来の効能が、豊かな自然とともに保存されている、そこがたいへん魅力でした。

あとで知ったのですが、東京にもいわゆる下町のフラットな場所があります。これは洪積台地が終わった海岸に近い所ですから、当然地盤はフラットです。大阪の町と似ていて親近感を覚えるのですが、大阪と違った新鮮な体験は生まれないような気がしました。それで、それまでに知っていた、麻布や六本木、青山、赤坂、そして渋谷や新宿のような、変化に富んだ場所に住みたいなと思ったのです。

新宿駅西口地下広場の仕事が終わり、東京で自分の仕事をスタートさせることになりました。それで、住む所を考えましたときに、やはり愛着が出てきた青山、神宮前の辺りに何とか住みたいと思ったわけです。

私の個人史を申し上げれば、祖父の代に大阪の町に出てきて住み着きました。小さい頃の聞き覚えですが、母方の祖父母は、高松と岡山から、家内の出身は和歌山県で、みんな明治の中頃から終わりに近県から大都市に出てきています。江戸もそうだった思うのですが、特に伝統のある都市では簡単に町の中心部に住みつくことはできません。主な町衆の方々に認めてもらって、何がしかのお金を積んで、店を構えたのでしょう。ですから、祖父母の代、明治までのパターンは、大都市の周辺部を転々として生計を営み、やがて成功すれば、それを元手に市内に住む場所を決めたのだと思います。明治以降は、このようなことは自由になったでしょうけれども、私が青山に住みつくときも、別の意味で結構な努力が必要であったのは確かです。

■江戸東京の地形と暮らしの関係

江戸の地図を見ると、青山の辺りは、大名が広大な土地を屋敷としていました。その間に、中級か下級の御家人の武家地がずっとあって、あとはお寺の境内が点々と見えてます。それ以外のわずかな所に、原宿村とか千駄谷とか、古い土地の地名があります。そこは畑だったと思われます。また、ある時期の江戸の地図には、茶畑という書き込みがたくさんありますから、赤坂見附から長い坂を上がって、青山の辺りは、丘の上で陽当たりのよかったのでしょう。そこに大名屋敷がありますが、明治以降は公用地になって、神宮外苑の広場、練兵場、大蔵省の官舎、小学校などができます。そして、残りのまとまった民間用地は大きな

会社や個人の所有から、高級マンションに入れ代わっています。わずかに古い道沿いに商店を営んでいたような場所が、今も町家として残っているという状況です。

東京オリンピックのときに、青山通りから原宿村の一画を通って国立競技場へ道をつくることになりました。江戸時代からの道を一部は使いましたが、その他は一直線につなぎました。ですから、昔の町割りに対して斜めに道が通ったのです。それで、三角の土地がたくさんできました。土地の区画の方向に対して斜めに新しい道路ができたものですから、あちこちに余りの三角地がいっぱいできました。航空写真を見てもよくわかります。いまでもその三角を利用して建てたビルが、大小たくさん並んでいます（**写真④**）。

写真④

写真⑤

■塔の家での暮らし

私たちは三角の土地を手に入れて塔状の家を建てました。地上五階、地下一階です。当時、家の周りは昔からの木造平家建てや二階建てが風景としてありましたから、私たちの家は塔の家という呼び名がつきました。その後、三五年間に道幅の広い道路が通り、どんどん都市化して、今ではコンクリート造五階建ての塔の家も町並みの中にすっかり溶け込んでいます（**写真⑤**）。

土地は約六坪で、建ぺい率は六割です。床面積はワンフロアに階段込みで七畳くらいですから、なるべく家の中に間仕切りを作らないで、ワンルームにして、階段で上下をつなげました（**図①**）。

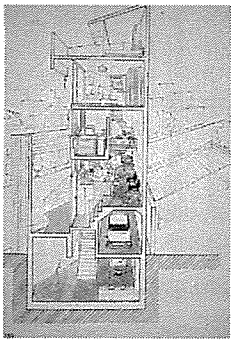
よく言われるのですが、ガレージも、台所も、食堂も、水回りも、寝室も、子供室もある。全部あるじゃないかと。それらをなるべく無駄なく、うまく関係がとれるように上下に結び付けましたので、現代の核家族の住まいの見本みたいになりました。ただ、横につながるものを縦に起こしただけだと言われたりもします。当時は、小学生の娘と夫婦の三人家族でしたから、合計五室、延べ二〇坪で納戸代わりの地下室がついていましたから、そんなに狭くはありません。例えば、大阪の町中で路地の家とか、せいぜい表通りの小さめの家で暮らしていても、使える面積はそんなものです。ですから、特に狭い家を造ったという意識はありませんでした（**写真⑥⑦⑧**）。

言いたいことは、家の各部屋にはさんさんと陽が射して、そのなかにこもって、読書をしたり、家族が団らんをしたりということだけが、私たちは暮らしだとは思っていなかったということです。私は独立して建築家としてのスタートを切ろうとしていたときでしたから、家内に、電話番なども手伝ってもらいたいし、私自身も仕事で遅くなって電車に長時間揺られて、やっと家にたどり着いてベッドにもぐり込むという毎日では駄目だと強く思っていました。家庭第一というより、家庭も仕事も大事で両者は一体です。住む場所さえ選べば、通勤時間はゼロに近くなるし、お昼休みに家へ帰って食事ができるし、何より一家全員が汗水流して働く、いわば中小企業の仕事をスタートさせただけだというつもりでした。

部屋はドアがない、トイレはカーテンはあるけれども、閉め切れない、子供部屋と親の部屋の音は筒抜け、部屋の移動は、階段を上がり下りしなければいけない、不便なことはもちろんありました。しかし、私たちがいちばん大事にしたのは、家族の関係です。また、隣近所とか、町中で私たちが果たさなければならない事もあります。仕事は地下室で始めたのですが、その後、歩いて移動できる範囲に仕事場を移しまし

写真⑥

写真⑦

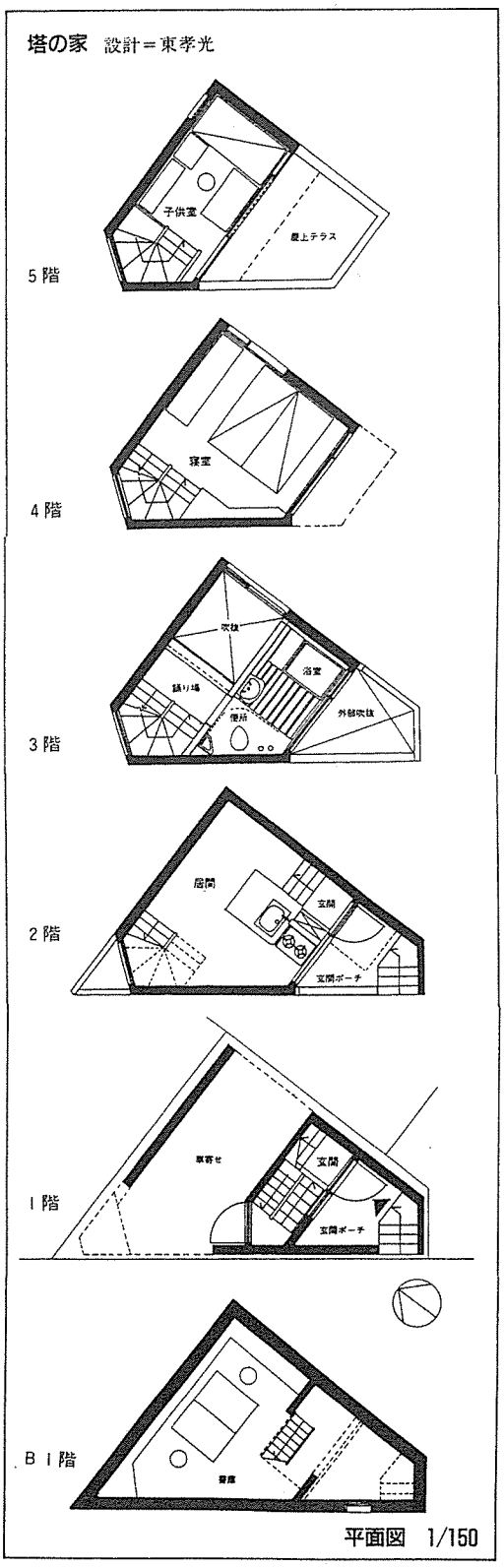


写真⑧

た。それで、そこと行き来する、その時間などを大事にしたいと思いました。

朝起きて、家で簡単に朝食を食べ、喫茶店に寄ってお茶を飲み、知り合いの人と会話を交わす。それから事務所へ行って仕事する。お昼には、歩いて家に帰って、家族一緒に昼食をとる、そういう生活を大事にすることが、つまりは都市の暮らし、集まって住む都市の暮らしなのです。もちろん、そのためのいろんな努力も必要だということも、私は強調しておきたいのです。

このようなことを三五年も繰り返して、気がつけば、私は六〇歳半ばを越してしまいました。今後どうするのかと質問もされますし、夫婦で話したりもしますが、私たちは町中で受け続けるいろんな刺激を力にすれば、当分の間、本当に足腰が立たなくなるまでは、健康に注意すれば、まだ頑張れると思っています。特に水平の暮らしに帰ろうと思わない自分たちに気付きました。



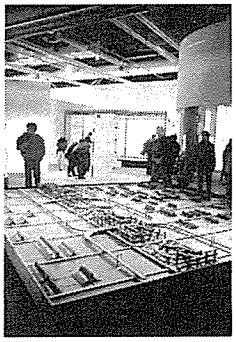
図①

■都市に暮らすことの意味

一九八〇年代半ばに、パリのポンピドーセンターで、「前衛芸術の日本」が開催されました。戦前からの前衛的な芸術作品の展示です。塔の家もそれに選ばれて、五〇分の一の模型を出品しました。模型を送ってパリに行ってみると、丹下先生の「東京湾海上計画」という大計画の模型があって、その向こうに塔の家の模型があったのです。いささか驚くと同時に、ニヤリとしました。丹下先生の東京湾計画は、新しい情報化社会のインフラを空中に飛ばして、その網の目に止まるような形で住居やオフィスや工場が造られていくという素晴らしい構想です。しかし、このインフラに組み込まれた建築に、ハエが止まったような個人の小さな家族の暮らしは、具体的にはどうなるのか。そういう、最終的な人間の暮らしを、建築家はいつも問題にしなければいけないのではないかと思って、私はニヤリとしたのです（写真⑨⑩）。

写真⑨

ヨーロッパの人も、塔の家に興味を示してくれました。塔の家は、我々がこの町の中で周りの人たちと一緒に暮らしていくという暮らしの形を大事にしています。その結果、塔の家が成り立っているのです。しかし、私のこの町でも住民がジリジリと減っています。いつの間にか青山通りの歩道から、小学生の声があまり聞こえなくなりました。残念なことです。住民が減り始める前後から、私ももう一度都心を再生することが必要だと発言するようになりました。



写真⑩

私が最初に、都市に住むとか、都心に住むということを言い出したのは、いまから三〇年以上前、塔の家ができて間もなくの頃でした。住民の減少を実感するようになったのは、一九八〇年代以降でした。バブルの前くらいからです。町の中では、土地利用効率の悪い住居は、もっと環境のよい郊外に出てもらう。そして、そこに世界の金融センターとかオフィスビルをたくさん建てて、東京を再生させるんだ、東京をもっと盛り上がらせるんだという話がありましたが、私はいつも首をかしげ続けていました。

基本に住む人がいなければ、都市というものは生きていけません。人が住んでいるということで、地上の歩道、一階の店舗や展示施設、美術館、劇場、そういう都市の文化活動がサポートされてきたのです。住む人があってこそ、人間の文化活動もあるわけです。これは日本のみならず、何千年の世界中の都市の歴史が証明していると思います。

数日前、ＮＨＫテレビで、「建築家、塔の上に住んで三五年」が放映されました。私は一週間ほどテレビカメラに追いかけ回されました。塔の家の内部にどのように三五年間も住んだかという話を、要領よくまとめていただきましたが、少し残念なところがありました。それは、私たちは狭い小さな、しかも不便な、上下につながった家に三五年住んだのではなくて、この町に三五年住まわせてもらったのだということです。このことがいちばん言いたかったのです。そして、当分の間、ここに住まわせていただきたいという話をしたつもりなのですが、どうも関心は、何でこんな変わった家に住んでいるのだろうかというところに向いたように思われるのです。「町に暮らす」という部分が抜けてしまったことを少し残念に思いました。また挑戦したいと思います。これで私の話を終わります。

討論

○陣内　討論に移ります。会場の方からのご質問に基づいて進めます。その前に五人の講師の方に重要な問題点をたくさん指摘していただきましたので、それを少し振り返ってみたいと思います。

まず、波多野さんが家に住むということは、結局町に住むのだ、ということから始まって、家の周りの構造から広い範囲での盛り場とか、人が行く賑やかな場所、そういう界隈のお話をご自身でつくられた模型を使って、分かりやすくお話いただきました。「家に住むということが結局都市に住むのだ」という論点は、今日のフォーラムのいちばんの基調だろうと思います。

それから、町がライブ感覚を持っていた。江戸のストリート・パフォーマンス、あるいはいろいろなお店、商い、人々の振る舞い、そういうものが都市を活気づけていた。それと「歩く町」だったことが町に魅力をつくり出す最大の条件だと感じました。

初田さんは近代の華やかな東京の姿を描くなかで、「賑わいのなかにまぎれる」という言い方をされました。江戸のストリートの賑わいは引き継がれながら、姿を変え、新しい要素をどんどん入れて活気ある東京の都心をつくり出した。やはり貸家が非常に多く手狭だったからか、みんな都市のアーバンライフをエンジョイしていた。

勧工場にはじまって、デパート、あるいはカフェ、果てはデパートの屋上庭園、そういう建築や都市施設が充実してきて、都市の魅力を生み、新たな都心居住の魅力を作ったことを話されました。

印象的だったのは、当時、都心の商業空間とか、繁華街を支えていた主役は山の手の人だったという指摘です。「山の手―下町論」というのは東京を語るのに重要なテーマですが、その山の手のエリアが、まだ都心に近かったのでしょう。都市に住むスピリットを山の手の人も持っていたのだと、つくづく思いました。

その山の手が実は戦後、解体されたのではないかなと。つまり、下町での都心居住の形式が発展しなかったり、住みにくくなって郊外にどんどん出て行ったという「下町解体」があったとすれば、山の手も同じように解体したのではないかという気がするわけです。これは重要な指摘でした。

大月さんは、日ごろのご研究を見事にまとめてくださいました。東京の都市の歴史において、集合住宅がどんどんできた輝かしい時代があったことを、明確に示してくださって、これには勇気付けられました。面白かったのは、震災後、仮設住宅を造ったときに、町をつくる意識があって、お風呂屋などの共同の施設まで造ったということです。そういうスピリットがあったのだろうと思います。

戦後については、「美しく住む」ことをめざして、高級集合住宅ができたお話がありました。その後、マンションが多く建てられているにもかかわらず、同潤会アパートは、地域や町のコンテクトの中にうまくはまり込んで、いい雰囲気を作り出しているという例を示されました。しかし、七〇年代以後はあまり見られないようです。その辺の問題点を論じられればと思います。

森まゆみさんは、調査やアクティブな活動を通じて内側から発見され観察された生

活感のある地域のあり方、そして人と人の関係の機微といいますか、そこにノウハウが蓄積されていて、見事に織りなされている関係性、その関係性の中で住むことは、非常に重要だと思うのですが、そういうことを示してくださいました。

東先生は、ご自宅でもある「塔の家」を、どういう思いでつくったかを話されました。「都市に住むということが、やはり町の暮らしと一緒になっているからこそ価値がある」というメッセージは、大変感銘深く伺いました。

■なぜ、都心居住にこだわるか

○陣内　最初に波多野さん、初田さん、大月さんに、こういう問題を研究でとらえていく時の原点というか、なぜ、都市居住に関心を持ったのかをお話しください。

私のことを言いますと、杉並の阿佐谷で育ったのですが、路地があって、共同水道があって、最初のころは銭湯に通って、そして、紙芝居が来ていたんです。そういう環境の中で育ったことは、都心居住の何かスピリットというのを植え込まれた気がします。また、イタリアに勉強に行って、ベネチアの建て込んでいる高密な中に、しかし、いろんなゆとりがある空間に、人との交流があって、刺激に満ちているという体感があります。その二つが自分にとっては大きな都心居住にこだわる原点になっています。

江戸を研究されている波多野さんは、ご自身が研究をしていること、自分の体験、その辺をどのように考えてられますか。

○波多野　個人的な話から始めさせていただきます。森さんが、都市居住者の優しさを話しくださり、嬉しくなりました。私の父親は、十思小学校の出身です。小伝馬町牢屋敷の跡に建つ小学校ですから、「便所に一人で行ってはいけないよ、死刑囚が便壷の中から引っ張るから」と言われたそうです。父親は大正二年生まれですから、江戸でも明治でもありません。でも、自分が体験した町は江戸の面影を残していると信じていたようです。

大正頃には、寺子屋のような私塾があったそうです。小学校で習った「兎と亀」の話を私塾の先生に報告し、「兎のように油断したり怠けてはいけない」と教わったと話したら、私塾の先生は「それは違うよ」と仰ったそうです。走るのが苦手な亀のような者に向かって、兎は勝負を仕掛けた。「君たちはあんな卑怯な人間にはなってくれるな、相手を思いやれ」。これが江戸人の美意識なのでしょう。

都市は、みんなが勝手な方向を向いていても生きられる世界です。一方向を目指した競争社会ではありません。あなたのやっていることは、それで面白い。自分のやっていることは、それとは違う世界で面白い。お互いに蹴落とす必要はない。それが多様性を認める、都市の魅力だと思います。

江戸の町人も、武家と対決するのではなく、おおらかに自分たちの世界を造り上げたと思います。

○陣内　ありがとうございます。

初田さんは下町の都心居住をずうっとある意味で子供のころからなさってきた。いまは比較的郊外のほうにお住みですが、その辺のご自身にとっての都心居住というのをお話ください。

○初田　私は、葛飾に生まれて二〇何年間ずうっと下町に住んでいました。その時の面白いな、楽しいなということが体の中まで染み込んでいて、繁華街の研究を始めたわけです。

住んでいたのは、まさしく下町の中の典型的な所で、三軒長屋でした。江戸から明治のころの長屋は、台所を「表台所」といって、道路側に付けている。それは道路で竈を使ったりする必要性からそうなっていたのです。私の住んでいた所も、やはり表台所の長屋でした。

父は、洋服の仕立をその家でやっていま

した。昼間はずうっと家にいますから、外に出たかったのだと思います。ちょっと手が空いた夜など、「夜店に行こうか」と、毎週のように家族をつれて出かけていました。夜店といっても、近くの駅まで歩いて行って、その辺をブラブラして家へ帰って来るだけなんです。お店に寄ったりもしますが、ほとんど何も買いません。やることといったら、帰りがけに牛乳屋さんに寄って、牛乳を飲んで帰ってくる程度なのです。しかし、そのことが当時の私たちにとってはとても楽しいことだったのです。

ある意味で、都心に住むということは、そういったもの、いわゆる都市の中のいろいろな施設を楽しめる。先ほど波多野先生も、江戸の中で都市に住むということは、一つのところで完結しないで、いろいろな施設にお世話になることだと言っておられましたが、まさしくそうだと思います。

話は変わりますが、昭和の初めに銀座が非常に賑やかになっていきます。そのころに書かれた『らんでぶーの案内　流線型アベック』という面白い本があります。そこに「わりかん銀ブラ法」というのがあります。ここには、いわゆるアフターワークというか、仕事の後の時間を楽しむ様子が描かれています。まさしくこれは、私が小さなころ体験したのと同じだと思って読んだことがあります。

その筋立てをお話しますと、主役はデパートのショップガールと、保険会社に勤めている彼氏です。勤務が終わった後に、新橋に近い大阪料理の店で夕食をします。向かいの座敷には芸者連れの人たちがいる。夕食後に映画を見てから、カフェのネオンを楽しみながら銀ブラをする。さらにダンスホールでタンゴを踊る。その後、疲れたので喫茶店でお茶を飲んで休む。そしてエンタクで駅まで帰る。

このようにアフターワークが楽しめるのも、やはり都心に近い所に住んでいるからです。そういう意味でも、都心居住をもう一度考え直してみる価値があるのではないかと思います。仕事の後に楽しめる世界と日常的に接するということを、考えてもいいのではないかなという気がいたします。

○陣内　ほんとうにそうですね。都心居住だからこそ、いろいろな体験ができる。私の知人で、地方都市に赴任した人が、都市がコンパクトだから、催し物にたくさん参加できて、文化的で楽しいと言っていたのを思い出します。

大月さんに、工学院大学の方から、「今後、登場すべき未来のアパート形式はなんだと思いますか」という質問がきています。そのことも含めて、戦後の集合住宅は歴史がプワーで、どうしてもニュータウン、郊外の居住に力が注がれて、専門家も計画理論もみんな目が外に行っていたような気がします。その辺をお聞かせください。

○大月　私も出自から述べますと、私だけがたぶん田舎者で、福岡県八女市という農村で生まれました。親はいまだに専業農家です。先ほど波多野先生から「自分のことが自分でできなくなったら都市だ」というご指摘がございましたが、田舎では他人と一緒にやらないと生きていけない面もあります。あらゆる作業が、例えば米の消毒ですとか田植などというのは共同でやらなければいけない。葬式もいまだに家でやっております。そのため、座敷は必ず何事かのためにキープしておかなければならず、新築の際も普段はほとんど使わない座敷をつくらねばなりません。地域と共同作業するための空間が、自宅内にそれぞれキープされているところが象徴的です。

その後、東京で建築を学び始めた時に非常に不安感がありました。ちょうどバブルで、世の中に建つ新しい建物がみんなツルツルピカピカで、とにかく金をかける建物がもてはやされて実際にバンバン建っていました。果たしてこんなものでいいのかという田舎者なりの不安を抱いていたわけです。

そうした時に同潤会アパートという、ちょっと古ぼけた建物に人々が住んでいるのを、東京をブラブラ歩いていて発見しました。そ

れで、これは一体どうやって成り立っているのだろうかと思いました。それが、そもそもの研究の動機です。暮らしている方々の話を聞いてみると、都心居住とは言いながらも、共同生活のあり方は私の田舎と同じではありませんか。森さんの「お裾分け」のお話のように、ちょっとした地域の問題は全部自分たちで共同で解決しなければいけないとか、そういうことが積み重なってアパートが運営されているのだと理解できたわけです。

お話しました同潤会アパートは、ポッと出来たわけではなく、様々に仕組まれた伏線の中で、たまたま大震災が起こって出来てきたのです。戦後もいくつか、集合住宅で都市をつくっていこうという発想は出てきていますが、なかなかものになっていかないのはなぜか。あるいは我々の実感できるような形で集合住宅が町として生きていかないのはなぜかが問われるわけですが、同潤会などを調べていて、二つの原因、つまり魅力の形成の仕方があると思いました。

一つは計画されたもの自体のもっている魅力。意匠性、計画性といった建築家や計画家の資質に根ざすものです。もう一つは、そこから先、運営のされ方が非常に魅力的なのです。例えば増築をしなければいけないとか、ここに空地があるから団地で集会場をみんなで建てましょうといって、ちょっとキッチュな物が出来たりするのですが、それはそれで素晴らしい。あるいは屋上が折角空いているから、屋上庭園を作ろうということで、屋上だけ緑が濃くなっていく。そういう当初の計画とは全く違う次元で住み手が築き上げていくという、第二の魅力があるのではないかと思います。そうした目で古いアパートを見ていると、敷地の中のあらゆる空間が増築用地や花壇としてさまざまに利用し尽されています。そうした重層性の中で「みんなに囲まれながら住む実感」という意味での魅力が醸し出されているのではないかと思います。

ところが我々は現在集合住宅というビルディングタイプのイメージをたった二つしかもっていないのではないかと思っています。その一つは賃貸アパート。要するに学生が住むような六畳一間や公営住宅のような賃貸アパート。もう一つは昭和三七年の区分所有法でようやく住居形式として認知されるようになった分譲マンション。つまり、賃貸アパートと分譲アパートという二つの概念しか我々は持ち合わせていないのではないかと、改めて気づくわけです。

そこで何が貧困なのかというと、同潤会以外にもいろいろな古いアパートなどを見ていますと、例えば今日ご紹介した戦前に出来たRCの銀座アパートでは、当初は中流の一人暮らしの人が主に住んでいたわけですが、どんどん事務所ビルに変容していくわけです。いまも住居として住んでいる人もいれば、オフィスとして使っている人もいる。あるいはギャラリーがたくさん出来ている、というような用途の使い方の変化が見られます。別の戦前に出来た木造アパートでは、戦後税金を払えずに国に物納して、仕方なしに居住者が買い取ってしまったような木造の分譲マンションみたいな形式の住宅もあります。

このように所有と利用と管理の在り方、この三つの在り方が時間とともにいかようにも変わり得るというのが、集合住宅の面白さではないかと思うのです。あまりそういう魅力を語らずに、ただ単に賃貸アパートか分譲かということで、我々は住居を選択しているというところに、集合住宅の様々な意味での貧困が集約されているように感じます。

たまたま集合住宅として与えられた空間にどういう可能性を見い出して、どういうふうに開拓していくかということのほうが、これからどういう形式をつくっていくかということより、私はひょっとして重要なのではないかという気がしています。先ほどの工学院大学の方のご質問で、未来のアパートの形式は何かというのがございましたが、要するに新たな形式を物理的に出していくよりもむしろ、いまある空間の性能をどのように使いこなせる可能性があるかを、一生懸命に考えた上で、賃貸アパートでも分譲マンションでもない住まい方や使い方を、議論をしていく必要があるのではないかと考えております。

■町らしさと都心居住

○陣内　ありがとうございました。重要な指摘をいただきました。三人の方には、自分にとっての都心居住の原点を、場合によっては出自まで含めてお話いただきました。

森さんには二つ質問がきています。一つは筑波大学の方からです。「谷根千地区は下町の風情を残した町づくりに成功しているように見えます。地域の歴史性を活かした町づくりを行っていく際に、重要なことは何ですか。ソフト面だけではなく、ハードの整備の際に活かせる点、忘れてはならない点など、これまでのご経験から、お考えをお聞かせください」ということです。

もう一つは、「谷中はいい町だと思います。しかし、地形面や町のつくりに災害に対する危惧を感じます。将来的に都市災害に対してどのような私見をお持ちですか」というものです。

台東区の木造住宅が密集している所を、防災的な観点から少し考え直そうという「町づくりアクション」が、ついこの間始まったばかりです。谷中の一部もそのゾーンになっています。ようやくその辺も光りが当たってきましたが、森さんのお考えをお願いします。

○森　難しい質問ですね。私は古い物は全部残せと言っているわけではありませんし、「町づくり」をやってきたかどうかというと、そんな大それたことはやっていません。地域雑誌を出し続けて、いくつかの建物の保存に係わりました。ただ、伝統的建造物群保存地区、いわゆる伝建地区のような町並み保存は、たぶん谷中や根津では無理でしょう。非常に多種多様な利害、全然違う職業、別の所で稼いでいる人たちですから、なかなか一つの目的で文化や観光のために町並みを全部保存しようなんていうことは難しいだろうと思います。そういう意味では登録文化財制度は、わりと緩やかないい制度だと思います。できるだけ使える形で使いながら、古いものがいっぱい混じり込んでいる町があっても、面白いのではないかと考えている程度です。

ずうっと古い家に住んできて、マンションに一度は住んでみたいとか、ピカピカの家に住んでみたいという人だっているわけですし、逆に自分はマンション育ちだけれども、長屋に住んでみたいとか、お寺の離れに住んみたいという人もいるわけです。そういう人たちがうまくチェンジできるシステムがきないかなと考えて、いま少しずつやっています。古い家を持っているけれども、自分はいま使わないという方から、例えば、芸大の大学院の学生さんたちが、安く借りて保存修復の現場にしながら住んで、その家を公開したり、みんなのたまり場にしていくようなこともあります。

災害対策は重要な問題で、古いのがいいのだとばかりは言っていられません。特に、脆弱な建物、筋交いが入っていなかったり、御神楽で載せたりする建物もありますから、そういうのはチェックして、安全にする努力が必要です。だからといって、万が一の災害のために、いまのこの楽しい近所関係や路地の景観を捨てて、例えば、全部壊して不燃化住宅にするのがいいのかどうか。そのほうが防災性が高まるのかどうかというと、それには非常に疑問があります。

○陣内　どうもありがとうございました。東先生へのご質問はアーキボックス株式会社の方からです。「最近、東京でも町暮らしについて再注目されてきていますが、東京（他の地域都市も含めて）がもっと町らしく都市らしくなるために、いまいちばん大切なことは何んだとお考えでしょうか」という非常に大きい問題です。

塔の家の周りにあれだけのビルが建ってしまっては、当初の生活感やお店なども少なくなっているかもしれません。生活環境を維持していく大変さも分かりましたが、その中で、もっと町らしく都市らしくするにはどうしたらいいかとお考えでしょうか。

○東　青山表通りはもちろん、枝分かれし

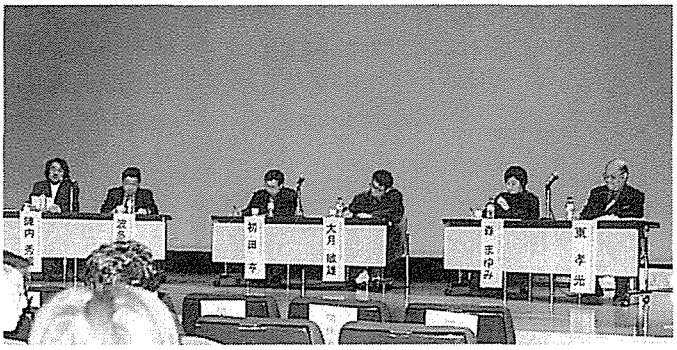
たキラー通りでも、街路樹の落ち葉の掃除、カラスの食べ散らしの片付け、いろいろなことがあります。その場合、家の前の道は住んでいる人が道を掃除する、というような風習が、町に住むための心得として生きているような気がします。

しかし、人が住んでいない大きなビルにレストランやアパレルの店がありますと、開店は一〇時とか一一時ですから、住んでいる人が自分のところだけお掃除しても、そのビルの前の部分だけが残ってしまう。だからついその部分も一緒にやってしまう。そのあとに、散らかった状況を知らないお店の人たちがゆっくり出勤してくるというギャップが起きます。ある社長さんはそのことに気づいてからは、会社の人たちが交替で朝早く出勤して、通り全体をお掃除しています。いま支え合っているんです。このようなことに対しては、谷中の人たちは、ノウハウをたくさんお持ちでしょうから教わるとよいでしょうね。昔は皆が持っていたことをもう一度学び直すべきですね。

結局、町らしさというのは、デザインの善し悪しとか、新しい建築とか、古い町並みということではないような気がします。もちろん防災の問題は別ですが、どんなに古くてもちゃんと注意して身繕いというのでしょうか、自分たちの家をしっかり使っているということがいいのだと思うのです。

アメリカのセントルイスという中西部の町に、ワシントン大学建築学科あります。私は一九八九年に客員で半年ほど家内と一緒に滞在しました。一〇〇年も前にオリンピックと万国博覧会を済ませたという町で、立派な公園や美術館、スタジアムもあるのですが、都心に人が住まなくなったのです。ビルがポツンポツンと壊されて、そこがパーキングになっています。残っているのはデパートと劇場とホテル。その外回りには古い住宅がたくさん並んでいて、低所得者の人々が移り住んでいます。その外側にスラムを避けた中産階級が立派な住宅団地をつくって、そこで暮らしています。彼らは、デパートに買物に来ても、クラシックコンサートで劇場に集まっても、終わると早々に帰ります。車に悪戯をされたり、帰り道が危ないからです。そして新聞には毎日のように都市のルネッサンスとか、都心をどう活性化させるかという記事が出ています。でも、起死回生の方法はなくて、まず基本は、もう一度町に帰って住もうというのです。そういう都心居住の再評価というか、居住が都市活動の基本にあって、そして商業、その他の経済活動、教育、文化、それに支えられているのだということをもう一度考え直すことが、町らしさを取り戻す基本だろうと思うのです。

もうひとつ申し上げたいのは、東京の歴史や文化の痕跡を取り除いた、地形の基本的な性質というか、そういうものがあって、人間の日々の営みは、それを活かして庭を造ったり、下町や山の手をつくったり、あるいは富士見坂のような坂道をつくったり、頂上にお宮さんをつくったりしています。そういうことを我々専門家はもう一度勉強をし直さなければいけないという点です。



■魅力ある都市の条件

○陣内　ありがとうございます。

それぞれの地域の地形や自然の条件というのも、個性や重要性を持ちます。ですから、いまのご指摘はこれからの町にとって、大切な柱のひとつになるのではないかと思います。

波多野さんに、建築というよりは都市計画の視点からの質問がきています。「魅力ある都市というものの一つに、食事の満足が挙げられると思う。最近、新鮮な食料への需要が高まっているが、都心では流通が便利になったという面もあるが、農地とは遠い存在である。江戸の農地は都市内に混在していて、作物と下肥のやり取りなど密接な係わりがあった。食料の供給以外にも農地は生態都市としてのさまざまな役割を持ってきたと言われている。江戸の市街地における農地及び農業と都市の関係を、そのまま持ち込むことは難しいと思うが、教えられるところ、取り入れられる部分はどのようなところか」と。

もう一つあります。「波多野先生のお話を聞いて、当時の町は人々の物質的なものだけではなく、精神的な面でも支えていたことを感じた。また、人々も町を支えていて、相互関係があった。現代の都市においての相互関係についてどう思われますか」という質問です。

○波多野　都市内農業について、二五年前から通っているネパールと比較して考えてみます。日本の都市、特に県庁所在地の七、八割は前身が城下町です。城下町は、兵農分離と商農分離を原則とします。武士を城下に集め、農民を村に住まわせるとともに、商業を城下に一元化します。したがって、都市内農業は存在しないことになりますが、現実にはかなり農地があったと思います。

一方、ネパール・カトマンズ盆地の都市は、イタリアの中世都市を思わせる高密度集落です。その周りはすべて農地ですから、集落は農地の海に浮かぶ島のようです。その都市住民のかなりの割合が農民なのです。周りの農地で取ってきた米を都市内の道路で干して脱穀をします。数年前とても嫌なことが流行しました。それは、道路に米をぶちまけて、車に轢かせて脱穀するのです。昔は、車が遠慮してUターンをしていたのに、と耐えられない気持ちになりました。それはさておき、ネパールでは都市と農業が並立しています。

バブルの時代に、「都市内農業に安楽死を」との意見がありました。宅地の供給を増やし、地価を下げるためです。戦前、東京を農地ベルトで囲む防災計画があったそうです。小金井の江戸東京博物館たてもの園の敷地はそれにあたるそうです。

都市内農地には、食物生産ばかりでなく、防災や環境維持など、様々な意味があります。都市内農地は、住民が応分の負担をしてでも、都市政策として維持してゆく責任があると思います。

○陣内　ありがとうございました。初田さんへは駒沢大学大学院の方からの質問です。「かつての都心の魅力を伺ったが、現在の都心においても、例えば表参道辺りでのオープンカフェや、善し悪しは別としてガードレールや階段、地べたに座り込む若者などは、都市を見る楽しさ、都市に自分を置く楽しさといったものを体験しているように思える。また、高層マンションも人気があって売れている。こういった現代の世代、階層の都市の楽しみ方をどのようにとらえていらっしゃるか」というものです。

○初田　私は道路に座るのはそんなに悪いことではないと思っています。私はやりませんが。都市の楽しみ方の一つで、楽しみ方も時代とともに変わってくると思います。ただ、どういう道路のどういう所に座るか、ということが問題になるのではないかなという感じがします。

都市というのは、そういうことまでも、基本的には許容している部分があるのではないか。あまりきれいなものだけで一色に染めていくというのは、どうかなという気

がするのです。道路に座ることを、あまり好ましくないと考える人たちもおられるかもしれませんが、一つの考え方、自分の価値観だけを全てに当てはめていくというのも、都市というものを考えた時には問題が出てくる。ある意味で、あらゆる自由さが都市にはある。自由さというのは、勝手なこととは違って、その自由には何らかの形の責任も入っている、というのが前提なわけです。そういったあらゆるものを許容できる可能性を、都市というのは持っているのではないかという気がします。

○陣内　ありがとうございます。住宅の内部についての質問ですので、大月さんか東先生にお答えをお願いします。「最近のマンションには和室はつくられるが、日本古来の伝統的空間である床の部分をつくることはほとんどない。同潤会にはあるがこのことについてどう考えるか」というものです。

○東　玄関追放の論争がかつてありました。あまり意味のない格式張った玄関は不要ということは確かにある。しかし、マンションでも玄関は残っていますよね。これは日本の道路事情から、泥で汚れた靴でそのまま室内に入るわけにはいかない。その靴を履き替えるスペースが必要だとか、不審者を玄関で撃退したいとか、要は使い方の問題で残っている。

床の間を造るのはとても無理ではないでしょうか。それは、集合住宅では一平方メートルどころか、一〇センチ角の面積をどうするかということまで厳しく問われる状況です。また、床の間をつくってもうまく使える若い人がいるかどうか。お花をや掛け軸、失われた生活習慣との関係では床の間の存在は危ういでしょうね。しかし、和風ということで言えば、ただ畳を敷いただけでは和風にならないのでプラスアルファー、何かそういうスペースが欲しいということは、若い人も皆さん感じていらっしゃるから、それなりのことは設計者はやっているのではないでしょうか。

■都心に住んでいくためには

○陣内　ありがとうございました。森さんに答えていただきたいのですが、明治大学の方からの質問です。「都心に対してこれからどのようなことに期待しておられるか、まだ未熟な学生のメッセージを含め、よろしくお願いいたします」というのと、中央大学の方から皆さんへの質問です。「文化史・生活史の視点から、これ以上残念なことを増やさないために私たちにどのようなことを求めますか」と。

この二つは同じ趣旨の質問と考えて、若い人たちがこういう大きな問題に対してどのように考えたらいいかというメッセージをお話しください。

○森　大きな解決策はもちろんないと思います。いま私は、新しく町に住みたい方と一緒に不動産屋さんを回ることが多く、面白いなと思ったことがあります。バブルのころよりずいぶん家賃が下がったのですが、それでも住み易い間取りの二DKだと一一～一二万円はします。だけど、もし、愛し合うカップルがいて、四畳半一室でもいいのだったら、二万五〇〇〇円で紹介してあげるという不動産屋さんがいるのです。ですから、二DKでお風呂付きのきれいな立派なマンションに住もうと思わなければ、四畳半ですが都心居住はカップルでも可能なんです。いまそういう人たちが私の町では増えてきています。狭くても彼と住んで銭湯に通って、居酒屋で飲んで、夏は浴衣着て遊んでいるのです。

私の母は、テレビで広い家なんか出ると「いやぁね、あんな広い家、掃除すること考えると気が遠くなるわ」って言っていたんですが、自分にとって何を価値観にするか。東先生がおしゃるように「これを捨てて、これを私は取るんだ」ということをはっきりさせればいいのではないでしょうか。OECDでの「日本はうさぎ小屋」コンプ

レックスからずうっと私たちは逃げられなくて、もっと広い家に住もうとしてきました。いまだに都市再生の中で居住面積を倍増しろなんて言っている人もいるのですが、むしろ広い家でセントラルヒーティングをやったために二酸化炭素を出して大気を汚して、温暖化が起こって、ヒンズーク山脈に雨が降らなくなって、アフガニスタンの水が涸れてしまったり、雪解け水がなくなったりしているわけですから、もっと生活のほうをミニマムにして、物は持たないでいいと私は思っています。

いま私が気になっているのは、いろいろな関係性というか、お互いさまという気持とか、例えば「頭」という人がやっていた役割とか、任侠と言うと混同されやすいので義侠と言ってもいいのですが、困った人を見捨てておけないという気持とか、たまり場である銭湯とか、そういうものが町からどんどん失われていく。そういうものはもともとNPOであったり、いまでいえばタウンマネージメントをやるような人も中にインプットされていたわけです。昔の形の頭とか義侠とか旦那道とかっていう訳にはいかないのでしょうが、もう一度復活していけたらもっと都心居住は豊かになり楽しくなるのではないかと思っています。

○陣内　素晴らしいメッセージをありがとうございました。建築の側から波多野さんにお願いします。

○波多野　森さんのおっしゃる通りだと思います。「歴史的な町並みの保存」といいますが、歴史的な町並みは今日まで百年間火事を出さなかったから歴史的な町並みになった。保存が話題になる前から受け継がれ、結果として近年保存対象になった。

谷中で火事を出したら出て行かなければいけないと言われましたが、そのような住み方や人間関係が、町を残してきたのです。

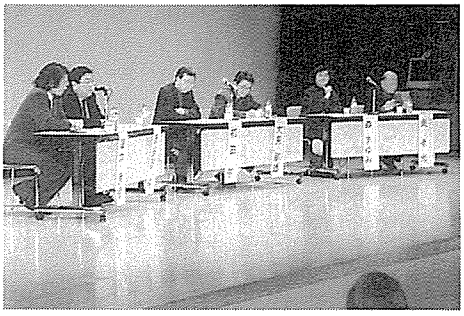
阪神大震災の後で、被災者住宅を郊外に建てて、抽選で引っ越させた。すると、お年寄りが亡くなっても、数日間気付かない状況が起きた。谷中だったら、誰かが死んで三日知らなかったという状況は絶対に起きない。大上段に保存なんて言わなくても、毎日のくらしが継続性を持つのが、ちゃんとした町だと思います。

阪神大震災のシンポジウムで、大手設計事務所のえらい方が、「都心に住むということは、全て耐震性の高い中高層マンションにして、避難場所など必要としないのが健全なのです」と言われた。その方々と闘って、生活の連続性や記憶の風景を伝えてゆくのが、私の仕事かなと決意しました。

○陣内　すっかりまとめていただきました。

今日は皆さんから都心居住を考えていく上での歴史的な大きいパースティクティブと、現在まさに生きるという両方の面から重要なお話をたくさん聞かせていただいて、今後を考えていく上での指針を我々は獲得できたのではないかと思います。効率の悪い住宅をどんどん追い出してきたという今までの政策を本当にけしからんとつくづく思うわけで、原点に立ち戻って住むノウハウをみんなでもう一回学びながら、そして多様なライフスタイルに適応した魅力ある住み方を、形式をすぐに考えるのではなくて、そういう関係をつくるのだということが重要だということを、今日は教えていただいたように思います。

これでフォーラムを終わります。



企画趣旨説明者・司会者・講師紹介

■陣内 秀信（じんない ひでのぶ）
法政大学工学部建築学科教授
経歴：福岡県生まれ（一九四七年）生まれ／東京大学工学部建築学科卒業／ヴェネツィア建築大学留学／東京大学大学院工学系研究科修了／工学博士
著書：「江戸東京のみかた調べかた」（共編著）／「東京の空間人類学」／「わたしの東京学」／「都市を読む・イタリア」／「東京」／「都市と人間」／「江戸東京学への招待②）都市誌篇」（共編著）
東京の都市空間の根幹である「江戸」の都市計画を探るため、東京を歩き回り、現在の東京と江戸との密接な空間構造を解明する

■波多野 純（はたの じゅん）
日本工業大学工学部建築学科教授
経歴：神奈川県（一九四六年）生まれ／東京工業大学理工学部建築学科卒業／工学博士
著書：「江戸城Ⅱ」〈城郭・侍屋敷古図集成〉／「復原―江戸の町」／「The Buddhist Monasteries of Nepal」（共著）／「建築史の回り舞台」（共著）／「江戸名所図屏風の世界」（共著）
江戸の建築・都市景観の復原的研究、長崎出島オランダ商館の復原、ネパールにおける仏教僧院の研究と保存にたずさわる

■初田 亨（はつだ とおる）
工学院大学工学部建築学科教授
経歴：東京都（一九四七年）生まれ／工学院大学工学部建築学科卒業／工学院大学大学院工学系研究科修士課程修了／工学博士
著書：「東京 都市の明治―路上からの建築史」／「百貨店の誕生―都市文化の近代」／「モダン都市の空間博物学」／「職人たちの西洋建築」／「模倣と創造の空間史」／「繁華街にみる都市の近代―東京」／「和風モダンの不思議」
近代の建築をみると、建築と都市とが密接な関係にあることがわかる。建築物を通して、都市の変遷史を展開する

■大月 敏雄（おおつき としお）
東京理科大学工学部建築学科講師
経歴：福岡県（一九六七年）生まれ／東京大学工学部建築学科卒業／東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得退学／工学博士
著書：「人間・環境系のデザイン」／「同潤会のアパートメントとその時代」／「二〇世紀建築研究」／「アジア建築研究」／「幻の住宅営団」（以上、分担執筆）
住み手が長期間にわたって、住環境を運営していく仕組みを模索中

■森 まゆみ（もり まゆみ）
作家・「谷中・根津・千駄木」編集人
経歴：東京都（一九五四年）生まれ／早稲田大学政経学部政治学科卒業／東京大学新聞研究所修了／地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を仲間と発行
著書：「谷中スケッチブック」／「東京たてもの伝説」（共著）／「鷗外の坂」／「明治東京畸人伝」／「抱きしめる、東京」／「大正美人伝」／「寺暮らし」
赤レンガの東京駅保存、不忍池の自然環境の保全など、生活環境・歴史的環境の保全運動を行うとともに、町の歴史を立体的な記録にして、その蓄積をすすめている

■東 孝光（あずま たかみつ）
建築家
千葉工業大学工学部工業デザイン学科教授
経歴：大阪府（一九三三年）生まれ／大阪大学工学部構築工学科卒業／郵政省建築部／坂倉準三建築研究所／東孝光建築研究所／大阪大学工学部環境工学科教授／工学博士
作品：「塔の家」／「大阪万国博覧会 三井館」／「さつき保育園」／「ワットハウス」
著書：「住宅を考えなおす」／「日本人の建築空間」／「居間は公園だ―の都市住居学」／「住まいと子どもの居場所一〇〇章」／「なぜ都心居住か―私の二都物語」（「すまいろん」一九九〇年秋号）／「都市・住宅論」
一九六六年、東京の都心に搭状住宅を設計し、戦後日本の住宅のあり方を象徴的に示すとともに、人が居住することによって、自然に得られる安全さ、清潔さ、優しさといったものが都市に必要であるという視点から、都心居住を問い直す

■江戸東京フォーラム話題一覧

（　）内の所属は話題提供時のもの

1986年

第1回	江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供	小木　新造	（歴史民俗博物館）
第2回	都市下層社会の形成と変容	内田　雄造	（東洋大学工学部）
第3回	やわらかい都市構造	陣内　秀信	（法政大学工学部）
第4回	考現学の考古学	佐藤　健二	（法政大社会学部）
第5回	明治期の道路（街区）・路地の幅員基準について	石田　頼房	（都立大都市ｾﾝﾀｰ）

1987年

第6回	博覧会と盛り場の明治	吉見　俊哉	（東京大学文学部）
第7回	明治期の繁華街の建築	初田　亨	（工学院大学）
第8回	東京の土地・住宅史	長谷川徳之輔	（建設経済研究所）
第9回	江戸の構成と構造	加藤　貴	（北区教育委員会）
第10回	水の都・深川成立史	吉原　健一郎	（成城大文芸学部）
第11回	江戸の建築技術	西　和夫	（神奈川大工学部）
第12回	松浦武四郎の一畳敷の書斎	ヘンリー　スミス	（ｺﾛﾝﾋﾞｱ大学）
第13回	徳川の旧家臣のみた、江戸・東京	井上　勲	（学習院大文学部）
第14回	路上から見た江戸・東京	藤森　照信	（東京大学生産研）
第15回	東京書物探索入門	大串　夏身	（都立中央図書館）
第16回	神田のサウンド・スケープの研究	鳥越　けい子	（法政大学）

1988年

第17回	絵画史料にみる江戸の町	波多野　純	（日本工業大工学部）
第18回	明治期東京の飲料水販売	松平　康夫	（東京都公文書館）
第19回	江戸城御殿の室内空間について －障壁画下絵による復原－	西　和夫	（神奈川大工学部）
第20回	小江戸・川越のまちとすまい	内田　雄造	（東洋大学工学部）
第21回	現代東京の祝祭	松平　誠	（立教大学）
第22回	丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住	岡本　哲志	（岡本都市建築研）
第23回	浅草寺の境内・門前世界	竹内　誠	（東京学芸大学）
第24回	都心定住を考える－市街地の「町」の現代的意味－	奥田　道大	（立教大社会学部）
第25回	都市社会調査の歴史から	佐藤　健二	（法政大社会学部）
第26回	世界都市東京の光と影	町村　敬志	（筑波大社会科学）

1989年

第27回	都市の語り出す物語	宮田　登	（筑波大歴史人類）
第28回	江戸の都市計画－江戸前島を中心として－	鈴木　理生	（区立京橋図書館）
第29回	江戸の武家屋敷について	北原　糸子	
第30回	江戸の被差別・東京の被差別 －もうひとつの江戸・東京－	大串　夏身	（都立中央図書館）
第31回	江戸東京の遊び－かるたを中心に－	村井　省三	（村井かるた館）
第32回	森　鴎外の都市論	石田　頼房	（都立大都市ｾﾝﾀｰ）
第33回	東京都心部における空間利用形態	山下　宗利	（筑波大地球科学）
第34回	「響き」としての東京の街なみ－神田地区における 建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心に－	鳥越　けい子	（ｻｳﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟﾃﾞｻﾞｲﾝ）
第35回	東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題	奥田　道大	（立教大社会学部）

1990年

第36回	鶴屋南北の幽霊	横山　泰子	（国際基督教大学）
第37回	東京と近代詩	行吉　正一	（江戸東京博物館）
第38回	同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐって －マンションの老朽化と建て替え問題－	内田　雄造	（東洋大学工学部）
第39回	東京の地価	前田　尚美	（東洋大学工学部）
第40回	江戸の地価	伊藤　好一	（関東近代史研究家）
第41回	江戸のごみ処理	伊藤　好一	（関東近代史研究家）
第42回	都市農業と土地問題	石田　頼房	（都立大都市ｾﾝﾀｰ）
第43回	天皇巡幸と「帝都」としての東京	吉見　俊哉	（東大新聞研究所）
第44回	江戸の名所・王子	加藤　貴	（北区教育委員会）
第45回	上水からみた江戸の都市計画	波多野　純	（日本工業大工学部）

第46回　江戸名所絵における遠近法……ヘンリー スミス（ｺﾛﾝﾋﾞｱ大学）

1991年

第47回　江戸図屏風にあらわれた風俗……丸山　伸彦（歴史民俗博物館）
第48回　鍬形蕙斎の江戸一目図屏風……小澤　弘（調布学園女子短大）
第49回　見立絵というもの ……鈴木　重三
第50回　江戸住宅事情……片倉　比佐子（東京都公文書館）
第51回　江戸・明治・大正のすまい……平井　聖（昭和女子大学）
第52回　最近の自治体住宅政策について……林　泰義（計画技術研究所）
第53回　東京市営住宅事業について……内田　青蔵（東工大附属高校）
第54回　東京における水際土地利用の変容
　－日本橋川と隅田川を中心として－……岡本　哲志（岡本都市建築研）
第55回　江戸から東京への景観構造変化……窪田　陽一（埼玉大学工学部）
第56回　東京都の都市計画と河川運河……昌子　住江（関東学院大学）
第57回　アジアのスラムと居住へのたたかい……内田　雄造（東洋大学工学部）

1992年

第58回　新宿ヤミ市の復原……松平　誠（立教大学）
第59回　鍬形蕙斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」を
　めぐって……小澤　弘（調布学園女子短大）
第60回　芝居町と観客－都市文化の底流をさぐる－……小木　新造（江戸東京歴史財団）
第61回　「よ組」を中心とした江戸火消しの活動……鈴木　栄一（千代田区議員）
第62回　近代演劇人による伝統の発見……横山　泰子（国際基督教大学）
第63回　博覧都市江戸東京……吉見　俊哉（東大新聞研究所）
第64回　読売から新聞まで……GERALD GROEMER
第65回　音の風景と近代の忘れもの－大分県竹田市
　瀧廉太郎庭園整備計画をめぐって－……鳥越　けい子（ｻｳﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ機構）
第66回　三越百貨店が演出した文化生活……初田　亨（工学院大工学部）
第67回　ヴェネツィアの経済空間－交易・市場・職人－……陣内　秀信（法政大学工学部）
第68回　都市のまつり……宮田　登（筑波大歴史人類）

1993年

第69回　江戸、初期の土地問題……吉原　健一郎（成城大文芸学部）
第70回　江戸勤番武士の生活……竹内　誠（東京学芸大学）
第71回　江戸のおんな……杉浦　日向子（江戸風俗研究家）
第72回　大名屋敷跡地の住宅地開発－麻布霞町の場合－……加藤　仁美（跡見学園短大）
第73回　新説・日本近代住宅史……藤森　照信（東京大学生研）
第74回　幻の東京オリンピックと万博……磯村　英一（東京都立大学）
第75回　東京市社会局と都市社会調査……佐藤　健二（法政大社会学部）
第76回　近代における東京の都市庶民住居の発展……江面　嗣人（文化庁文化財）
第77回　江戸の町と京都の町……小川　保（清水建設㈱技研）
第78回　「まち」の死に立ち会うとき－汐入をめぐって－……伊藤　毅（東大工学部建築）
第79回　谷中墓地をめぐって……森　まゆみ（谷根千工房）

1994年

第80回　首都の葬送空間－江戸・東京の火葬場と墓地－ ……八木澤　壮一（東京電機大学）
第81回　葬式のフォークロア……宮田　登（筑波大歴史人類）
第82回　東京一極集中と今後の課題
　－より豊かな都市空間をめざして－……東郷　尚武（東京市政調査会）
第83回　東京都政の50年……大串　夏身（昭和女子大短大）
第84回　博物館の住宅展示を考えて
　－人々は生活史をどうみるか－……ｼﾞｮﾙﾀﾞﾝ　ｻﾝﾄﾞ
第85回　都市空間とセクシュアリティ……上野　千鶴子（東京大学文学部）
第86回　メディアとしての絵はがき……佐藤　健二（法政大社会学部）
第87回　メキシコシティと東京の間で……吉見　俊哉（東大社会情報研）
第88回　北京と東京の比較都市論
　－歴史的空間構造と近代化のメカニズム－……陣内　秀信（法政大学工学部）
第89回　川越のまちなみの復元……内田　雄造（東洋大学工学部）
　浅井　賢治（東洋大学工学部）
第90回　河鍋暁斎と江戸東京……小木　新造（江戸東京歴史財団）

1995年

第91回　都市と美術館と絵画－パリ・ロンドンと日本－……小澤　弘（調布学園女子短大）
第92回　野村コレクション「小袖屏風」とその周辺……丸山　伸彦（歴史民俗博物館）
第93回　終戦直後の東京の生活をさぐる資料……天野　隆子
第94回　歌謡曲のなかの東京……大串　夏身（昭和女子大短大）
第95回　江戸の着物文化……田中　優子（法大第一教養部）
第96回　江戸東京学への招待試論……小木　新造（江戸東京博物館）
第97回　「境内」からみた三都
　　－三都の比較都市史序説－……伊藤　毅（東京大学工学部）
第98回　盛り場考……神崎　宣武
第99回　近世都市空間の創出過程について
　　－都市構築の基盤材調達の視点から－……北原　糸子
第100回　江戸東京学への招待……小木　新造（江戸東京博物館）
　　－生活の舞台としての都市空間－　陣内　秀信（法政大学工学部）
　　高階　秀爾（国立西洋美術館）
　　田中　優子（法大第一教養部）
　　司会：内田　雄造（東洋大学工学部）
第101回　都市の民俗学－色・音・匂の変化－……小林　忠雄（歴史民俗博物館）

1996年

第102回　同潤会柳島アパートの生活……大月　敏雄（東京大学工学部）
第103回　同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設に
　　ついて……佐藤　滋（早大学理工学部）
第104回　住文化の体験の場としての博物館　……小澤　紀美子（東京学芸大学）
第105回　縁切寺－東慶寺と満徳寺－……高木　侃（関東短期大学）
第106回　考古学からみた江戸と他都市との比較……小林　克（歴史文化財団）
第107回　日本パノラマ館と凌雲閣－浅草の２つの巨大建築は、
　　当時の人々にどのような印象を残したか－……平井　聖（昭和女子大学）
第108回　震災復興＜大銀座＞の街並みから……石川　幸恵（清水建設総務部）
第109回　明治初年の大火と貧富分離論……石田　頼房（工学院大学）
第110回　戦災復興計画の理念とその遺産－東京、仙台、
　　名古屋、神戸、広島等をめぐって－……越沢　明（長岡造形大学）
第111回　関東大震災後の東京の住宅地形成について……藤岡　洋保（東京工業大学）
第112回　カフェーと喫茶店……初田　亨（工学院大学）

1997年

第113回　橋のアーバン・デザイン……伊東　孝（日本大学）
第114回　城下町大坂、江戸の都市設計……篠原　修（東京大学工学部）
第115回　東京都都市景観マスタープラン
　　－新たな景観まちづくりへの展開－……布施　六郎（東京都）
第116回　江戸・東京の湯屋……松平　誠（女子栄養大学）
第117回　江戸城から宮城へ
　　－皇居を中心とする都市空間の変容－……米田　雅子
第118回　江戸藩邸物語……加藤　貴
第119回　建築家、佐藤功一と都市への視線……米山　勇（江戸東京博物館）
第120回　明治の歌謡にみる東京……大串　夏身（昭和女子大短大）
第121回　「江戸名所図会」と長谷川雪旦……鈴木　章生（江戸東京博物館）
第122回　町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水
　　－絵図・図面にみる江戸の都市施設－……波多野　純（日本工業大学）
第123回　参勤交代－巨大都市江戸のなりたち－……原　史彦（江戸東京博物館）

1998年

第124回　寛永13年江戸城外堀普請と周辺地域の変化……栩木　真（新宿歴史博物館）
第125回　関東・東国の部落史
　　－部落史の「見直し」論議に引きつけて－……藤沢　靖介（部落解放研究所）
第126回　明治期の被差別部落
　　－都市東京と植民地主義の言説編制から－……友常　勉（部落解放研究所）
第127回　関東大震災と朝鮮人虐殺事件……石田　貞（埼玉同和教育協）
第128回　原宿の空間構造－人気の秘密を歴史から読む－……柳瀬　有志（法政大学工学部）
第129回　横浜市の市営住宅事業について……水沼　淑子（関東学院女子短大）
第130回　目白文化村とその変貌……八木澤　壮一（東京電機大学）

第131回　住総研創立50年記念公開フォーラム……小木　新造（江戸東京博物館）
地域学の明日を考える　橋爪　紳也（京都精華大学）
結城　登美雄（まちづくりプランナー）
森　まゆみ（作家）
司会：陣内　秀信（法政大学工学部）
第132回　江戸歌舞伎の特色……服部　幸雄（日本女子大学）

1999年

第133回　東京・明治大正の人口問題……小木　新造（江戸東京博物館）
第134回　江戸東京フォーラムと住総研……大坪　昭
墨壷（伝統的な）の履歴書……吉田　良太
第135回　「ふるさと」としての東京深川－ある個人的な感想－川田　順造（広島市立大学）
第136回　都市と農村の蜜月時代
－近郊農業の展開と流通の変化－……江波戸　昭（明治大学商学部）
第137回　永井荷風と東京……湯川　説子（江戸東京博物館）
第138回　公開市民フォーラム……立壁　正子（「ここは牛込、神楽阪」）
地域雑誌からみた町　野口　由紀子（「武蔵野から」）
大野　順子（「まち雑誌　千住」）
司会：森　まゆみ（「谷中・根津・千駄木」）

2000年

第139回　「ニュースの誕生」展と江戸東京学……木下　直之（東大総合研究博物館）
北原　糸子（東大社会情報研究所）
佐藤　健二（東京大学大学院）
吉見　俊哉（東大社会情報研究所）
富澤　達三（神大常民文化研究所）
第140回　長崎出島の復原と「海を渡った大工道具展」……西　和夫（神奈川大学）
千野　香織（学習院大学）
波多野　純（日本工業大学）
第141回　大久保にみる都市の国際化……稲葉　佳子（㈲ジオ・プランニング）
第142回　神田多町－震災復興の「まち」から見えるもの－……小藤田　正夫（千代田区まちづくり公社）
第143回　築地・横浜の外国人コミュニティ……森田　朋子（お茶の水女子大学）
第144回　江戸東京フォーラムの果たした役割……太田　博太郎（日本学士院）
小木　新造（江戸東京博物館）
陣内　秀信（法政大学工学部）
第145回　遺跡から江戸の生活文化を探る……波多野　純（日本工業大学）
－江戸考古学最新情報－　後藤　宏樹（千代田区立四番町資料館）
栩木　真（新宿歴史博物館）
司会：小林　克（江戸東京博物館）

2001年

第146回　江戸の見世物……川添　裕（見世物文化研究所）
第147回　千住の町おこしと地域博物館の取り組み……所　理喜夫（足立区立郷土博物館）
荒居　康明（町並み研究家）
波多野　純（日本工業大学）
大野　順子（町雑誌「千住」）
第148回　祭礼からみた都市空間の変容と地域コミュニティの形成
－神田祭りを主な素材として－……伊藤　裕久（東京理科大学）
第149回　江戸の女性と布橋灌頂会－立山博物館の試み－……鳥越　けい子（聖心女子大学）
米原　寛（立山博物館）
第150回　都心居住の再考……波多野　純（日本工業大学）
－江戸東京の生活史・文化史の視点から－　初田　亨（工学院大学）
大月　敏雄（東京理科大学）
森　まゆみ（「谷中・根津・千駄木」）
東　孝光（建築家・千葉工大）
司会：陣内　秀信（法政大学）

2002年

第151回　モダン都市・東京の読書空間……永嶺　重敏（東京大学資料編纂所）
－読書装置の1920～30年代－　佐藤　健二（東京大学）
司会：吉見　俊哉（東京大学）

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは 1986 年５月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、７月に第１回フォーラムを開催しました。翌年度から、財団委員会活動として、現在に至っています。

当初の委員会は、小木新造（江戸東京博物館）を委員長として、委員は内田雄造（東洋大学工学部）と陣内秀信（法政大学工学部）でした。1998 年度に、当初の小木新造、陣内秀信の他に、波多野純（日本工業大学）、森まゆみ（作家）、横山泰子（法政大学）、吉見俊哉（東京大学社会情報研究所）で再構成をしました。更に、2001 年度に、小澤弘（江戸東京博物館）も委員として、より学際的なフォーラムを目指しています。

主な参加メンバーは、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学・文学・美術史・地域学・地理学等の研究者ですが、関心ある方は、どなたでも参加することができます。自由で活発な議論や意見交換があります。各分野での先端的な問題意識も示され、お互いの刺激と示唆を与えあう場です。

フォーラムの目的は、東京を再考することです。東京は、政治、経済、情報、文化が一極集中しています。都市機能が雑然と混ざり合って、極めて輻輳した多重構造都市とも言えます。この東京を解明するには、江戸から今日までの一貫した視座でとらえること、都市研究に必要なあらゆる学問分野の専門家が、同じフロアで情報や意見交換をして、共通の研究基盤を持つこと、すなわち、学際的に展開をすることです。このようにして、江戸東京の文化の変容、都市形成、日常生活などを再考します。

2000 年度から、フォーラムを企画するにあたり、企画の基本柱をつくっています。その基本柱は、①「記憶」としての都市、②「地域研究」の掘り下げ、③文化学・都市文化学で「1920～30 年代をきる」、④情報網の構築を江戸明治に学ぶ、の４つです。

いままでの話題を分類しますと、大きく３つに分けられます。第１は、文化的様相です。文化発信都市である江戸東京を 浮世絵や屏風絵の史料から多角的にアプローチし、祝祭、娯楽、風俗、モード、メディアなどに表れる都市の文化的様相を読み解きました。第２は、都市空間・生活空間です。江戸開府とともに始まった都市計画は、柔軟で固有な都市を形成してきました。それを問い直し、生活空間としての都市のアメニティを考えました。第３は、生活の場です。江戸東京に住む人々は、いかにコミュニティを形づくってきたかを考察しました。生活の場としての住居、界隈、人づきあい、風景、環境の移り変わりなどを見つめ、大都市のまちづくりのこれまでとこれからを再考しました。江戸東京における生活空間や都市文化のあり方に関して、ハードな面からソフトな面まで広い範囲に及んでいます。

21 世紀は「都市の時代」だと言われています。全世界の人口の大半が都市や都市化社会の中で生活を営むようになると言われています。そのような時代を迎え、江戸東京フォーラムでは、東京を舞台に総合的な都市研究に取り組み続けます。

「都心居住の再考
ー江戸東京の生活史･文化史の視点からー」
2002 年 4 月 30 日 発行 ©

編　集＝江戸東京フォーラム委員会
発行人＝峰政克義
発　行＝財団法人 住宅総合研究財団
〒 156-0055
東京都世田谷区船橋四丁目 29 番 8 号
Tel. 03-3484-5381　Fax. 03-3484-5794
E-mail:suzuki@jusoken.or.jp
URL:http://www.jusoken.or.jp/
印刷所＝株式会社 七映

住宅総合研究財団について

当財団は、1948（昭和 23）年、当時の窮迫した住宅問題を、住宅の総合研究、および成果の公開･実践･普及によって解決することを目的に、当時の清水建設社長･清水康雄氏の私財の一部を基金として設立された財団法人である。

以来 50 数年、現在は住宅に関する研究助成事業を中心に、シンポジウムの開催、機関誌「すまいろん」の発行などの活動を続けている。

・基本財産　　23 億 5,900 万円（2001.3　現在）
・年間事業費　　7 億円